

日本語の基本数詞シのヨとヨンへの言語変化について —ヨン化とヨ化を発音資料に探る—

城 岡 啓 二

0. 序

日本語の基本数詞シとヨンなどの関係を扱う論文を発表するのははじめてではない。城岡（2009）は、地名や姓などの固有名詞でヨン・ナナ・キューが使われているか、また、いつ頃から使われているかなど、固有名詞におけるシ・シチ・クからヨン・ナナ・キューへの言語変化について考察を行った。また、城岡（2010）は静岡大学人文学部公開講座の内容を整理したものであるが、ヨン・ナナ・キューへの一般の語彙の言語変化を大雑把にまとめている。

シは、ヨンへの変化以前にヨに変化したものもあり、シチからナナへの変化、クからキューへの変化と比べて複雑であり、考察すべき点も少なくない。本稿は、固有名詞と比べてある程度容易に発音資料が入手できる一般の語彙における「四」を対象として、主として明治以降にこうむった言語変化を調査し、まとめたものである。各種の発音資料の出版年を調査し、その結果をもとに変化の時期や条件を考察する。日本語の数詞や助数詞では、漢語ないし漢語由来の数詞や助数詞の方が和語よりも基本的で重要であるが、ヨンの普及は和製漢数詞ヨンの成立も意味していたので、それについても論じたい。和語の数詞・助数詞については、近年のヨハコからヨンハコへの変化などについてのみ触れる。

固有名詞よりも発音資料が多い一般の語彙についての調査といっても、数詞はかな書きされることもなく、「四」に対応する数詞の中でもっとも新しいヨンという数詞がいつ頃から使われ始めたかについてさえじつは資料が多くない。そのためか、日本語の専門家の記述の中にもあきらかな誤解があるようである。宮島（1967）は国立国語研究所が行った雑誌の語彙調査をもとに機械的に日本語の基本語彙として1000語を取り出し、その1000語が『日葡辞書』から『研究社和英大辞典』までの外国語と日本語の二ヶ国語辞典の見出し語として存在するかどうか調べ、日本語の語彙の増大を論じている。ところが、ヨンやキュー

については、「和英のうちで最新最大の『研究社和英大辞典』（1954年版）でも、1000語中つぎの8語がおちている」として、「四（よ・よん）」や「九（きゅう）」に触れている。さらに、「このミスは、武信・井上にまでさかのぼる」と書いている。宮島はヨンやキューが明治時代の井上十吉の『新訳和英辞典』（1909、三省堂）や昭和初年の武信由太郎の『新和英大辞典』（1931、研究社）の見出し語に採用されていないことを二ヶ国語辞典の不備と考えているようであるが、ヨンやキューの普及が比較的新しく、標準形として辞書に採用されたのが比較的新しいという事実を見落としているのだろう。明治期に標準形として数詞のヨンなどを想定することはおよそ考えられないので、井上十吉がヨンを採用していないことは当然であるし、武信の『新和英大辞典』にしても、1931年なら外国人向けの日本語教材などでヨンの採用は始まっているが、不採用も続いている時期なので、辞書の見出し語への不採用が不備とは言えない時期にあたる。

ヨンが古くから使われていたと誤解されている例は他にもある。国立国語研究所が編集にあたっている『牛店雑談安愚楽鍋 用語索引』（1974、秀英出版）では、索引の見出しが「よんじゅう、よんじゅうごもんめ、よんじゅうよんもん、よんひゃく、よんもん」とヨンを使っている。また、「十二万三千四百五十六石」が「じゅうにまんさんぜんよんひゃくごじゅうろっこく」という読みが付けられている。これでは明治5年に出版された口語小説でヨンが使われているということになってしまうが、それはあり得ない¹。『用語索引』の付録として復刻されている原書を調べてみると、ヨンとしている箇所はすべてふり仮名がなく、索引は現代日本語の感覚で作られてしまったようである。ヨンについては、江戸時代のロドリゲス（1608）やコリヤード（1632）の記述にもなく、わたしの目に触れた中では、最初の記述は、チェンバレンの口語ハンドブックの2版（1889、明22）のものである²。チェンバレンは、口語の行き過ぎた傾向として、シの代りにヨを使うだけでなく、ヨンを使うことがあると書いている。1888年（明21）の初版にはなく、2版で追加された記述である。シニンではなくヨニンを使うというシの代用のヨについて述べたあとで、「卑語では更に一步進んでヨがヨンとなる。例えばシ-ジューfortyの代りにヨン-ジューと言うだろう。」

¹ 他にも、「しじゅう」が空見出しで、「よんじゅう」を見るように指示している箇所が指摘できる。「四十」に「よんじゅう」の言い方が当時あったと勘違いさせてしまいそうだし、「しじゅう」という言い方よりも「よんじゅう」が基本的な言い方だったことを暗示してしまうことになりそうだ。学術的な文献の索引の付け方としては不適當であることは言うまでもない。

² 城岡（2009）でサトウの英和口語辞典をヨンについての最初の記述としてあげたが、チェンバレンの方がもっと早い。

(『155、『チェンバレン『日本口語文典第2版』翻訳』、大久保恵子訳、笠間書院、1999)。「卑語では」と訳されている部分は、2版でthe vulgarを使っているが、3版(1898、明31)でcolloquialismを使って説明し直しているところを見ると、「卑語」というほど下品な意味あいを少なくとも3版が出たときには考えていなかったはずで、庶民の言葉や口語程度のニュアンスだったと思われる。

1. 資料と調査について

1.1 発音資料

数詞や助数詞の正確な発音が調査できる資料は、大別すると、①外国人向けの日本語教材や辞典、②小学校低学年向けの国語の教科書や参考書、③アクセントや朗読法のための発音辞典の3種類になる。外国人が書いたものであれ、日本人が書いたものであれ、外国人向けの日本語の文法書、教材、辞書など(外国語学資料と呼ぶことにする)はローマ字で日本語を記述したものが多く、数詞もローマ字で記載されているものがかなりある。日本人向けに出版された書籍では、ふり仮名を多用する場合でも、数詞にふり仮名は付けないことが多いが、例外が小学校低学年向けの教材やアクセント辞典³のたぐいである。なお、調査対象は最近のものまでまんべんなく一様に集めるのが理想ではあるが、ヨンやヨハの変化を探る目的の調査なので、20世紀中葉以前が多くなっていて、最近のものはやや手薄になっていると思われる。

1.2 出版年調査について

本稿では出版年調査の結果を次のように表記する。「四勿」の例で示しておこう。

【四勿】

- ① シモンメ (ホフマン 1867、高橋発音 1904、マツミヤ 1939)
- ② ヨモンメ、ヨンモンメ (GHQ 1946)
- ③ ヨンモンメ (ダン/ヤナダ/エコノ 1958、平山アク 1960、NHKアク新 1998)

³ 発音辞典やアクセント辞典は、現在では、アナウンサー養成やアクセント矯正の目的のために出版されるようになり、小学校の国語との関連は薄くなっているように思う。しかし、最初の発音辞典は高橋(1904)の『国定読本発音辞典』であるし、本格的なアクセント辞典の嚆矢である常深・神保(1932)の『国語発音アクセント辞典』も「尋常小学国語読本」と「尋常小学読本」の語彙すべてを収めていると序文で述べており、小学校の国語教育を念頭に置いて出版されたことは間違いない。

発音資料には①シモンメ、②ヨモンメ、ヨンモンメ、③ヨンモンメと三つの形式の組み合わせがあった。このように出現形によりまず分類し、同じグループの文献の中の順番は、出版年の早いものから「ホフマン 1867、高橋発音 1904、マツミヤ 1939」のように列挙している。①から③までの縦の順序は、最左端の文献、つまり、それぞれのグループの中でもっとも古い文献の出版年により上から順に並べてある。したがって、①→②→③のように変化したことが想定できるので、「四列」の場合は、資料があまり多く見つかっていないが、シモンメ→ヨモンメ→ヨンモンメと変化したことがたどれる結果になっている。ただし、ヨモンメという語形を記録している資料は1946年の1点しかなかったので、ヨモンメが一般的に使われていたかどうか、また、使用時期の詳細について確実に推定できるだけの情報量はないだろう。

次に、もう少し複雑な様相を呈している「四列」の出版年調査の結果を見ておこう。

【四列】

- ① シレッツ (サトウ 2 1879)
- ② ヨレッツ (サトウ 3 1904)
- ③ シレッツ、ヨレッツ (初教研 [1924]－1933)
- ④ ヨンレッツ (文化庁 1971、文化庁 1975、NHKことば 1 1992、NHKアク新 1998)
- ⑤ ヨレッツ、ヨンレッツ (マックレイン 1981、NHKことば 2 2005)

語形の組み合わせが①から⑤までの5つもあり、シレッツやヨレッツに不連続な展開も見られ(シレッツは②にないのに、③でまた出てくる。ヨレッツも④で途切れているのに⑤で復活している)、単純な展開ではない。とはいえ、①から⑤の並び方で示される「四列」の言語変化は、大雑把に見れば、シレッツ→ヨレッツ→ヨンレッツになっている。「四列」は、軍隊用語として使われだしたのか、サトウと石橋の『英和口語辞典』の初版(1876)にはないが、2版(1879)にはシレッツと出ている。おそらく、この頃に頻繁に使われだしたのだろう。3版(1904)は別の2人の編集者が『英和口語辞典』を増補改訂したもののだが、今度はヨレッツになっていて、yoretsu ni wakare. という例文もあげている。その後、ヨレッツとシレッツの両方をあげる文献も1点あるが、シレッツが廃れ、ヨンレッツという新しい言い方が生じている⁴。複雑な様相を帯びるのは、文献により標準形として

⁴ ヨンレッツが登場するのはかなり新しく、ヨンレッツ(文化庁 1971、文化庁 1975、NHKことば 1

認める語形についての判断がことなるからであろう。

もうひとつ、調査した助数詞で語形の組み合わせがもっとも複雑だった「四羽」の例も出しておこう。「羽」は、本来は、漢語ではなく和語であるが、イチワ、ニワと言いつつ習わしており、日本語の中で漢語として扱われていると言える。チェンバレン (1887: 27) に「羽ハもと和訓なれど、支那数詞と組立るを常とす」とあり、明治期でも支那数詞つまり漢数詞と使われる助数詞であった。

【四羽】

- ① シワ (ホフマン 1867、アストン 1869、サトウ 2 1879、アストン 1888、チェンバレン 1888、コバヤシ [1896]–1908⁵、アカダ/サトミ 1903、ホパ・サトウ 3 1904、ウェインツ 1904、鈴木 1906、初教研 [1924]–1933、ヴァカーリ 1937、ヴァカーリ [1939]–1946、サリヴァン 1944、タカハシ 1945、イノウエ 1958、上甲 1960)
- ② シワ、ヨワ、ヨンバ (ヤマギワ 1942)
- ③ シワ、ヨワ、ヨンワ (長沼 1951)
- ④ シワ、ヨワ、ヨンワ、ヨンバ (マーティン 1954)
- ⑤ シワ、ヨンバ (オノ 1963)
- ⑥ ヨンワ (小川/佐藤 1963、NHKアク 1966、マックレイン 1981、タニモリ 1994)
- ⑦ シワ、ヨンワ、ヨンバ (セワード 1968、NHKアク 1985)
- ⑧ ヨンワ、ヨンバ (NHKことば 1 1992、にほんごの会 1995、NHKアク新 1998、NHKことば 2 2005)
- ⑨ ヨンバ (谷守 1992)
- ⑩ シワ、ヨンワ (ペリー 2008⁶)

ヨ化、ヨン化、一種の連濁 (ワ→バ)⁷の三つが関係していて、複数の語形を

1992、NHKアク新 1998) であった。しかし、完全にヨレツという言い方を駆逐したわけではないことは、ヨレツとヨンレツの両形を認める文献もマックレイン (1981)、NHKことば 2 (2005) があり、2000年以降も続いていることで確認できる。

⁵ 1908年の出版は2版であるが、「2刷」ほどの意味しかないかもしれない。1921年の「訂正第六版」、さらに、1924年に出版されたものも確認したが、内容に一切変更はないようだ。少なくとも1924年の版までヨンがまったく使われていないことは確かである。

⁶ この辞書はSamuel E. Martinの*Martin's Concise Japanese Dictionary* (1994) の改訂版であるが、数詞や助数詞の記述は元の辞書にはなく、改訂時にペリーが付けたものであろう。辞書中では1994年版も2008年版もfortyにヨンジュとシジュの二つをあげているが、数詞の表ではヨンジュだけになっているなど、判断に変化がある。

⁷ あとで詳しく見るが、サンとヨンでは助数詞が連濁するかどうかで著しい対立があり、ヨンに後

認めるにしてもその組み合わせが発音資料によりかなり違う。ペリー（2008）のシワは著者の勘違いかもしれない。しかし、同一人物の記述でも、谷守（1992）がヨンバなのに、タニモリ（1994）ではヨンワになっているなど記述を変えている場合がある。NHKアク（1966）がヨンワで、NHKアク（1985）がシワ、ヨンワ、ヨンバを出していて、こちらも記述が変わっている。どちらも桜井茂治・秋永一枝両氏による数詞や助数詞の発音やアクセントの解説からであるが、かなり書きかえられていて、内容に違いが出ている。「四羽」の場合は、単純な言語変化というわけではなく、本稿で追及はしないが、地域差なども関係しているのだろうか、複雑な結果になっている。それでも、シワ→ヨワ→ヨンワ／ヨンバという大きな流れの変化は上の調査結果から見てとれることは確認しておきたい。

出版年調査にあたっては、初版の出版年が言語データの出典という意味では重要である。多くの資料にあたってみると、ほとんど初版と同じ内容としか思えないのに「版」がことなる場合が多く、資料の中身は初版当時の言語状況をあらわしていて、初版以降の言語状況が変わっていても、対応していない場合が多い⁸。言語変化を各版の記述の違いでたどれるヘボンの『和英語林集成』やサトウの『英和口語辞典』のような文献は、むしろ、めずらしく、例外と言える。したがって、調査は、なるべく初版や初版に近い版で行うようにする必要がある。図書館の相互貸借などを利用して、可能な限り初版やなるべく古い版を参照したが、不可能な場合もある。出版年調査した文献が初版でない場合で、初版年を示すことに意味があると判断した場合には、本稿では、[1924]－1933のように、初版年を[]に入れて示すことにする。ただし、度数分布表を作成するような場合は実際に調査した版の出版年をもとにした。出版年の調査は、

続する助数詞は連濁しないという規則性がある。連濁と言えそうな例はヨンバしかない。しかし、サンバの場合は、サンハ→サンバと、ハ行清音が濁音に変化する連濁だった可能性が高いが、ヨンバの場合は、厳密には連濁ではなく、むしろ、サンバにつられて、ヨンワからヨンバに変わったものだろう。なお、ロドリゲス（1608）ですでに「一羽」はichiuと表記されており、ハではなく、ワと表記されている。助数詞ではないが「鳥の羽根」なら『日葡辞書』にfaと表記されているので、助数詞のワも以前はハ（正確にはファ）だったのだろう。

⁸ 1920年代以降の出版物ならヨンが見つかるもよさそうだが、出版物は、一般に、初版時の言語状況を記述しているものようで、小林米珂の*Kelly & Walsh's Hand-Book of the Japanese Language for the Use of Tourists and Residents*は、数詞や数詞と助数詞の組み合わせた発音について詳しく扱っているが、1924年に出版されたものにもヨンはまったく現れていない。1908年の2版（初版は1896年）も見たが、この間に数詞・助数詞はかなり急激な変化を受けているはずであるが、記載の違いはないようである。

「版」と「刷」の区別を前提にして版の出版年を調査した⁹。なお、調査結果の記述は基本的にカタカナで行うが、元の資料にカタカナで書いてあるという意味ではない。ローマ字資料を解釈したものが多くをお断りしておく。また、直接引用する場合以外は「十」などの表記はジューと長音符を使い、ジュウとは書かないが、これも元の資料がそのように書いてあるという意味ではない。

なお、出版年調査の結果で本文に入れていないもので資料的価値のありそうなものは、巻末に付録にしたので、参照されたい。

2. 出版年調査でとらえる「四」の言語変化

シの代わりにヨを使う変化をヨ化、ヨンを使う変化をヨン化と呼んでおこう。まず、ヨ化が起き、その後にヨン化が起きているが、明治期以降に変化が起き、分かりやすいヨン化をまず扱い、その後にヨ化を扱うことにする。

2.1 ヨン化の開始時期について

独立用法¹⁰の数詞4の出版年調査の結果を整理すると次のようになる。

【4】

- ① シ（日葡辞書 1603、ロドリゲス 1608、コリヤード 1632、ヘボン 1 1867、川上 1872、ヘボン 2 1872、サトウ 1 1876、和独対訳辞林 1877、サトウ 2 1879、村松 1886、草鹿 1886、ヘボン 3 1886、チェンバレン 1886、チェンバレン 1888、ランゲ 1890、和独字彙 1897、小宮山 1898、丸善和仏 1899、バレー [1899]—1908、大倉和独 1901、アカダ/サトミ 1903¹¹、プラウト 1904、ラゲ/オノ 1905、シャンド 1907、ノッス 1907、ウェイ

⁹ しかし、版と刷の区別は現代でもあいまいな場合があるが、明治・大正時代の日本の出版物では、版も刷も版と記載しているものが多いようである。たとえば、竹原常太の『スタンダード和英大辞典』は、奥付によると、1924年11月に初版が出て、翌1925年5月25日には20版が出ていることになっている。架蔵本は、初版から約2年後の1926年10月20日に出版され、「訂正増補第25版」とされている。したがって、版を刷とみなして、判断した文献もある。また、初版第1刷以降に出版された図書について出版年を表記しない実用書があることにも注意が必要である。おそらく、内容が古くなっているというイメージを払拭するために意図的に行われた操作だと思われるが、そのような場合は、Webcat Plusなどで初版の最初の刷の出版年を調査した。

¹⁰ ヨは、ヒー、フー、ミー、ヨーと数える場合以外は独立用法の4として基本的に使えない語形なので、独立用法と助数詞併用形の区別があいまいな文献にシとヨがあげられていても、本稿ではヨを独立用法としては認めていない。イチ、サン、ヨ（一）などが使われたことを示す実例はないので、正しい扱い方だと考えている。

¹¹ 1911の4版、1913年の5版、1920年の9版も調査したが、基本的には初版を踏襲している。シワ

ンツ 1904、ウェインツ 1907、金澤 1908、ザイデル 1910、註解和独 [1912] -1917、藤澤 1914、マックガバン 1920、鉄道省 1933、アベ 1937、オキノ 1943、タカハシ 1945、キヨオカ 1946、マツミヤ 1946、ダン/ヤナダ/エコ 1958、レヴィン 1959、シラト 1962、マルタン 1970、マックレイ 1981)

- ② シ、ヨン (ローズ=イニス 1915¹²、ローズ=イニス 1919、グロスマン 1927、ハラダ/クニトモ 1934、オモト 1936、ヴァカーリ 1937、ヴァカーリ [1939]-1946、ヤマギワ 1942、サリヴァン 1944、ブロック/ジョーデン 1945、GHQ 1946、ツチエ 1948、アブラハム/ヤマモト 1950、長沼 1951、マーティン 1954、イノウエ 1958、平山アク 1960、ジョーデン 1962、小川/佐藤 1963、オノ 1963、ミウラ 1965、セワード 1968、イナモト 1972、カワタ 1977、基礎 I 分冊 1978、NHKことば 1 1992、玉村他 1993、NHKアク新 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008)

シを単独であげる文献とシとヨンの両方をあげる文献の二つのタイプがあるが、シは1603年の日葡辞書から1981年のマックレインまで唯一の基本数詞としてあげられている。ヨンは開始時期が遅く、1915年が最初である。シとヨンの両方をあげる文献は1915年のローズ=イニスから2008年のペリーまで続いている。したがって、1915年から1981年までのかなりの期間に二つのタイプの重なりが見られる。重なりの期間を詳しく観察すると、シしかあげない文献は1940年代を過ぎると少なくなっているのに対して、シとヨンの両方をあげる文献は1940年代になるとかなり見つかるようになっていて、シしか認めない文献を大幅に凌駕するようになってきている。この辺りが転換点になっているようだ。

表 1 は、出版年調査の結果を1860年までと、それ以降、10年刻みに2010年まで区切って、度数分布表を作成したものである。2件以上の文献が見つかった年代には網掛けをした。網掛け部分に注目すると、シがシ・ヨンの上方に分布しているのが見て取れるので、シからシ・ヨンへの大きな変化が理解できるだろう。細かく見ると、シだけをあげる文献が1901年から1910年までに11件あるのに、1910年以前にヨンをあげる文献は存在していない。次の1920年までの10

リ (40%) とシブ (4%) とシクワイ (4回) というような言い方が4版から確認できたが、数詞・助数詞の部分でこれが唯一の追加である。

¹² ローズ=イニスは基本数詞としてのヨンをもっとも早く記録しているひとであり、多くの日本語教材の著者でもある。厳密に言えば、文献を1915aと1915bなどと区別する必要があるが、わずらしいので省略した。ローズ=イニスの他の文献も同様である。

年間はシだけをあげる文献が3件に対して、シ・ヨンあげる文献が2件あり、大きな差はなくなっている。以降、基本的にシ・ヨンの方がシよりも一般的になり、件数も上回るようになってきている（1990年までの10年間は例外）。

【14】

- ① ジューシ（ロドリゲス 1608、ヘボン 1 1867、川上 1872、ヘボン 2 1872、サトウ 1 1876、和独対訳辞林 1877、サトウ 2 1879、村松 1886、草鹿 1886、ヘボン 3 1886、チェンバレン 1886、チェンバレン 1888、ランゲ 1890、和独字彙 1897、小宮山 1898、丸善和仏 1899、ホバ・サトウ 3 1904、プラウト 1904、ウエイツ 1904、ラゲ／オノ 1905、ノッス 1907、金澤 1908、サイデル 1910、註解和独 [1912]－1917、シャンド 1907、マックガバン 1920、アベ 1937、ヴァカーリ 1937、ヴァカーリ [1939]－1946、ヤマギワ 1942、オキノ 1943、ブロック／ジョーデン 1945、アブラハム／ヤマモト 1950、長沼 1951、マーティン 1954、ダン／ヤナダ／エコ ン 1958、シラト 1962、ジョーデン 1962、ベルリッツ 1974、マックレイ ン 1981)
- ② ジューシ、ジューヨン（グロスマン 1927、ハラダ／クニトモ 1934、タカハシ 1945、マツミヤ 1946、レヴィン 1959、平山アク 1960、小川／佐藤 1963、オノ 1963、ミウラ 1965、イナモト 1972、マーティン 1975、玉村他 1993、ペリー 2008)
- ③ ジューヨン（オモト 1936、カワタ 1977、基礎Ⅰ分冊 1978、)

表1 シとヨンの出版年調査から

| | シ | シ・ヨン |
|---------|-----|------|
| 1860年まで | 3件 | 0件 |
| ～1870年 | 1件 | 0件 |
| ～1880年 | 5件 | 0件 |
| ～1890年 | 6件 | 0件 |
| ～1900年 | 3件 | 0件 |
| ～1910年 | 11件 | 0件 |
| ～1920年 | 3件 | 2件 |
| ～1930年 | 0件 | 1件 |
| ～1940年 | 2件 | 3件 |
| ～1950年 | 4件 | 7件 |
| ～1960年 | 2件 | 4件 |
| ～1970年 | 2件 | 5件 |
| ～1980年 | 0件 | 3件 |
| ～1990年 | 1件 | 0件 |
| ～2000年 | 0件 | 3件 |
| ～2010年 | 0件 | 2件 |

ジューヨンを採用しないでジューシだけしかあげない文献がマックレイ ン(1981)まで続いている点とジューヨンのみをあげる文献が3点しかない点に注 目したい。ジューシからジューヨンへの変化は、調査結果に基づくと、まだ完 了したとは言えないようである。

【40】

- ① シジュー（日葡辞書 1603、ロドリゲス 1608、ヘボン1 1867、川上 1872、サトウ1 1876、サトウ2 1879、草鹿 1886、ヘボン3 1886、チェンバレン 1886、チェンバレン 1888、ランゲ 1890、和独字彙 1897、小宮山 1898、丸善和仏 1899、バレー [1899]－1908、大倉和独 1901、プラウト 1904、ラゲ／オノ 1905、ノッス 1907、ウェインツ 1904、ウェインツ 1907、金澤 1908、ザイデル 1910、註解和独 [1912]－1917、藤澤 1914、シャンド 1907、マックガバン 1920、アベ 1937、NHKアク 1943、オキノ 1943、マルタン 1970)
- ② ヨソ¹³、シジュー（ルマレシャル 1904）
- ③ シジュー、ヨンジュー（ローズ＝イニス 1915、ローズ＝イニス 1919、グロスマン 1927、鉄道省 1933、ハラダ／クニトモ 1934、ヴァカーリ 1937、タカハシ 1945、ブロック／ジョーデン 1945、マツミヤ 1946、GHQ 1946、ツチエ 1948、アブラハム／ヤマモト 1950、長沼 1951、マーティン 1954、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、レヴィン 1959、平山アク 1960、シラト 1962、オノ 1963、ミウラ 1965、イナモト 1972、マーティン 1975）
- ④ ヨンジュー（オモト 1936、ヴァカーリ [1939]－1946、ジョーデン 1962、小川／佐藤 1963、ベルリッツ 1974、カワタ 1977、基礎1分冊 1978、マックレイン 1981、玉村他 1993、ペリー 2008）

チェンバレンが口語でヨンジューが使われることがあると書いた明治22年といえは1889年であるが、1943年に出たNHKの最初のアクセント辞典でさえ、シジューしか載せていない。一般にヨンジューが日本語の記述にあらわれるのは20世紀になってからである。チェンバレンのヨンジューの記述は確かに早いですが、日本語の基本的な数詞としてヨンジューの語形をあげているわけではないことに注意する必要がある。チェンバレン（1889：100）があげる数詞の表では、ヨンは使われず、シ、ジューシ、ニジューシ、シジューという語形しかないのは、標準形としてはヨンがまだ認められていなかったことを示している。調査した発音資料でヨンジューを日本語の標準的な数詞の語形として最初にあげているのは、ローズ＝イニスで1915年ということを見ると、ヨンジュー（そしてヨン）は、使われ始めたのは明治中期以降であっても、普及が始まるまでかなり

¹³ 『和仏大辞典』で「四十」の意味でヨソの見出し語をあげている。「四十」がヨソというのは間違っているが、当時の普通の日本語だったとも思えない。

時間がかかったことになる。

【400】

- ① シヒャク（ヘボン2 1872、和独対訳辞林 1877、草鹿 1886、ヘボン3 1886、ランゲ 1890、バレー [1899]－1908、アカダ／サトミ 1903、ルマレシャル 1904、プラウト 1904、ウェインツ 1904、ラゲ／オノ 1905、ノッス 1907、金澤 1908、ザイデル 1910、藤澤 1914、シャンド 1907、アベ 1937、オキノ 1943、ワグスタッフ 1947、アブラハム／ヤマモト 1950）
- ② シヒャク、ヨンヒャク（グロスマン 1927、ヴァカーリ [1939]－1946、タカハシ 1945、マツミヤ 1946、GHQ 1946、長沼 1951、マーティン 1954、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、レヴィン 1959、平山アク 1960、オノ 1963、文化庁 1971、文化庁 1975、マーティン 1975）
- ③ ヨンヒャク（ブロック／ジョーデン 1945、ジョーデン 1962、小川／佐藤 1963、ミウラ 1965、ベルリッツ 1974、基礎Ⅰ分冊 1978、マックレイン 1981、玉村他 1993、ペリー 2008）

唯一の語形としてシヒャクだけをあげる発音資料が1950年で終わっている。シヤシジャーだけをあげる発音資料が終わるのが1981年だから、かなり早い時期にシヒャクからヨンヒャクへ移行したことを示す一事実であろう。また、シヒャクを選択使用として認める資料も1975年を最後に終了しているのも、現在はヨン化が完了していると思えることができるだろう。

【4000】

- ① シセン（アカダ／サトミ 1903、高橋発音 1904、プラウト 1904、ラゲ／オノ 1905、ノッス 1907、ザイデル 1910、藤澤 1914、オキノ 1943、アブラハム／ヤマモト 1950）
- ② シセン、ヨンセン（グロスマン 1927、タカハシ 1945、GHQ 1946、長沼 1951、マーティン 1954、レヴィン 1959、オノ 1963）
- ③ ヨンセン（ヴァカーリ [1939]－1946、マツミヤ 1946、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、平山アク 1960、ジョーデン 1962、ミウラ 1965、マーティン 1975、基礎Ⅰ分冊 1978、マックレイン 1981、玉村他 1993、ペリー 2008）

全体的に資料が少ないが、シセンを選択使用として認める最後の資料が1963年であり、シセンからヨンセンへの移行は完了しているだろう。

【4万】

- ① シマン（ヘボン2 1872、和独対訳辞林 1877、郵松 1886、ヘボン3 1886、ルマレシャル 1904、ラゲ／オノ 1905）
- ② シマン、ヨンマン（グロスマン 1927、タカハシ 1945）
- ③ ヨマン、ヨンマン（マツミヤ 1946、長沼 1951）
- ④ ヨンマン（ダン／ヤナダ／エコノ 1958、平山アク 1960、ジョーデン 1962、文化庁 1971、文化庁 1975、マーティン 1975）

資料の数は少ないが、シマンを認める文献の最後が1945年で、シからの言語変化の完了はこれまでの数詞の中でもっとも早いと言える。ヨ化とヨン化については、グロスマン（1927）とタカハシ（1945）でヨンマンが使われているが、もう少しあとで、ヨマンという言い方がマツミヤ（1946）や長沼（1951）に出てくる点が特異である。ヨンマン→ヨマン→ヨンマンという言語変化は不自然であるから、おそらく、個人差や地域差などが関連しているゆらぎで、基本的には、シマン→ヨマン→ヨンマンの流れを見るべきだろう。ヨマンが短期間存在したことは2点の文献があるので確かだと考えられるが、すでにヨンマンも使われており、ヨ化してすぐにヨン化したはずである。②の文献ではシマンとヨンマンが言わば同居しており、ヨ化を介さずに一気にヨン化した場合もありそうだ。

さて、今度は、ヨン、ジューヨン、ヨンジュー、ヨンヒャク、ヨンセン、ヨンマンの初出文献の出版年で整理しておこう。

- ① ヨンの初出文献……1915(大4)
- ② ジューヨンの初出文献…1927(昭2)
- ③ ヨンジューの初出文献…1915(大4)
- ④ ヨンヒャクの初出文献…1927(昭2)
- ⑤ ヨンセンの初出文献…1927(昭2)
- ⑥ ヨンマンの初出文献…1927(昭2)

結果をみると、数詞の中でヨンの使用が早かったのは、ヨンとヨンジューである。

一方、無声子音と有声子音で始まる漢語助数詞のヨン化の初出年を調べると、ヨンバンだけは初出文献の時期はかなり早いですが、数詞のヨン化よりも明らかに遅れていることが明確である。

- ① ヨンホンの初出文献……1942(昭17)
- ② ヨンヒキの初出文献……1937(昭12)
- ③ ヨンマイの初出文献……1942(昭17)
- ④ ヨンバイの初出文献……1951(昭26)
- ⑤ ヨンバンの初出文献……1927(昭2)

ヨンバンは例外的に早い、助数詞併用形の「四」よりも独立用法の「四」のヨン化の方が早かったことになろう。また、ヨンバンが早いといっても、1927年で、1915年が初出のヨンやヨンジュの方の方がもっと早い。つまり、独立用法の「四」のヨン化はシがヨンに変わったものであるから、ヨンをヨの変化と捉えるような見方は歴史的な事実と反しているということである。助数詞と使われたヨバンのヨなどが最初にヨンに変化したわけではないということでもある。明治時代の文献も含めて、ヨとヨンを同じようなものと見なす素朴な見方があるが、ヨがヨンに変わって使われるようになったのは、シがヨンに変わったあとのことである。

出版年調査の結果から初出文献だけでなく、1911年から1960年までの発音資料の件数を10年ごとにまとめた度数分布表を作って、ヨン化の始まりの時期について考察してみよう。0件と1件のセルには網掛けをしているので、この網掛け部分と網掛けの付いていない部分に注目してもらいたい。要するに、網掛けの付いている部分は、まだ初出文献がなかった時代と、初出はしているが、まだ普及が進んでいない時代と見ることができる。数詞では、やはり、ヨンとヨンジュが早く出現し、ジューヨンがやや遅れている。ヨンヒャクとヨンセンとヨンマンはやや遅れて普及しているが、普及はジューヨンより早かったらしい。ジューヨンを認める文献は1931年から60年にかけて2件ずつとあまり増えていない。単独の数詞と助数詞を比較すると、助数詞の使用ではヨン化が遅れているのは明らかで、

その中でも、助数詞が無声子音で始まるヨンホンやヨンヒキが少し早く、有声子音のヨンマイ、ヨンバイ、ヨンバンは遅れている。ただし、発音資料が1件の箇所にも注目すると、1927年に初出年のあるヨンバンはかなり早いことも分かる。後で見るように、通話品質が低かった電話でヨンバ

表2 数詞単独と助数詞併用形のヨン化の時期

| | ～1920年 | ～1930年 | ～1940年 | ～1950年 | ～1960年 |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|
| ヨ　　ン | 2件 | 1件 | 3件 | 7件 | 4件 |
| ジューヨン | 0件 | 1件 | 2件 | 2件 | 2件 |
| ヨンジュー | 2件 | 1件 | 4件 | 7件 | 5件 |
| ヨンヒャク | 0件 | 1件 | 0件 | 5件 | 5件 |
| ヨンセン | 0件 | 1件 | 0件 | 4件 | 5件 |
| ヨンマン | 0件 | 1件 | 0件 | 2件 | 3件 |
| ヨンホン | 0件 | 0件 | 0件 | 3件 | 5件 |
| ヨンヒキ | 0件 | 0件 | 1件 | 3件 | 4件 |
| ヨンマイ | 0件 | 0件 | 1件 | 1件 | 4件 |
| ヨンバイ | 0件 | 0件 | 0件 | 0件 | 3件 |
| ヨンバン | 0件 | 1件 | 0件 | 1件 | 2件 |

ンのような言い方が普及し始めた可能性が高いが、電話番号でヨンバンを使ったとしてもどんな状況においてもシバンがヨンバンに変わったということではないはずで、そのことが初出年が早いにもかかわらず、ヨンバンの普及は必ずしも早くないことと関係しているのだろう。ヨンバンは1940年以前に1件の発音資料しかなく、その後もすぐに普及が進んだわけではないことが出版年調査の結果から分かる。

ヨン化は、1910年代から1950年代にかけて大きく進んだと考えられる。普及初期の証言としては、1920年（大正9年）に出版されたマックガバンの口語日本語の教科書がある。数字の表や助数詞との組み合わせではヨンはまだ使っていないが、多くの場合にヨンやヨがシの代わりに使われるとし、漢語助数詞とも使われると述べている（In many cases, even with Chinese numerals *yo* or *yon* takes the place of *shi* (“four”), *nana* the place of *shichi* (“seven”)(these two from the Japanese numerals), and *kyu* the place of *ku*. Thus *yon jū roku*, “forty-six”; *nana jū go*, “seventy-five”; *kyu jū hachi* “ninety-eight,” etc. p.93）。マックガバンは、すでに確立した言い方であるヨニン（4人）やヨネン（4年）は当然使っているが、「4分の3」は *shibun no san* だし、時間の「4分」も *shi-fun*、「明治45年」も *shi jū go nen*、「鉛筆4本」も *shi hon*、「イス4脚」も *shi kyaku* である。したがって、ヨンを正式な言い方としてはまだ認めていない。とはいえ、1920年の時点で、すでに、ヨンの普及は始まっていたことをマックガバンの記述は証言している。それがキヨオカ（1946：84）になると、近年、シのかわりにヨ¹⁴やヨンを使い、シチのかわりにナナを使うことが広く行われるようになってきたと書いている（In recent years the use of *yo* or *yon* instead of *shi*, and *nana* instead of *shichi* has come into general use. The reason is that the sound of *shi* and *shichi* are difficult to distinguish especially over the telephone. Needless to say *yo* was borrowed from *yottsu* and *nana* from *nanatsu*.）。キヨオカが記述している時期は、和語の助数詞を除いて、数詞でも助数詞でもヨン化が種類をとわず顕著になっていた時期に相当する。

2.2 ヨン化の完了時期について

ヨン化の開始ではなく、完了の時期を考えてみよう。シとヨンの併用時期に

¹⁴ シのかわりにヨが使われるのは新しい傾向ではなく、当時はすでに終了期であり、ヨ化への言語変化はもはや下火になっていたと考えられるので、やや観察不足、あるいは誤解があるものとされる。

続いて現れるヨンの単独使用時期がヨン化の完了、正確に言えば、完了の始まりをあらわしていると捉えることができるだろう。まず、出版年調査の結果から数詞について出してみると、次のようになっている。

- ① ヨンだけをあげる初出文献……………なし
- ② ジューヨンだけをあげる初出文献……………1936 (昭11)
- ③ ヨンジューだけをあげる初出文献……………1936 (昭11)
- ④ ヨンヒャクだけをあげる初出文献……………1945 (昭20)
- ⑤ ヨンセンだけをあげる初出文献……………1946 (昭21)¹⁵
- ⑥ ヨンマンだけをあげる初出文献……………1958 (昭33)

ヨンだけをあげる初出文献はまだなく、ヨン化にもっとも抵抗があったのが、「四」である。しかし、ジューヨンよりは大きなヨンについては、遅くとも1950年代までにはヨンがシに比べて優勢になり始めていたことは確かであろう。

2.3 ヨン化と助数詞の種類

比較的新しい言語変化であるヨン化についてグラフにまとめ、ヨン化の言語変化を概観しておくことにする。ヨンの選択使用と単独使用の区別から出版年調査の結果を整理してみよう。シからヨンへの変化は、ヨを経由するものとヨンへ直行するものと二つのタイプがあるが、ここでは話を分かりやすくするために、ヨン直行型の変化で選択使用と単独使用の概念を説明しておこう。想定される言語変化は、まず、シの時代があり、それから、シとヨンの併用時代が続き、完全にヨン化すれば、ヨンの時代が後続するはずである。併用時代の始まりを「ヨンの選択使用」の年とし、単独使用が始まる年を「ヨンの単独使用」と捉えるのである。下の「四冊」の調査結果で示すと、ヴァカーリ (1937) の1937年が「ヨンの選択使用」の年であり、「ヨンの単独使用」の年はタカハシ (1945) の1945年である。

【四冊】

- ① シサツ (サトウ 2 1879、コバヤシ [1896]—1908、アカダ/サトミ 1903、ホバ・サトウ 3 1904、伊沢 1911、国語調査委 1916、常深アク 1932、マツミヤ 1939、NHKアク 1943、サリヴァン 1944、イノウエ 1958、ブレイラー 1963)

¹⁵ ヴァカーリ ([1939]—1946) は1939年の初版は未見なので、ここでは1946とした。

- ② シサツ、ヨンサツ (ヴァカーリ 1937、ヴァカーリ [1939]–1946、ヤマギワ 1942、キヨオカ 1946、長沼 1951、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、セワード 1968、イナモト 1972)
- ③ ヨンサツ (タカハシ 1945、上甲 1960、平山アク 1960、小川／佐藤 1963、ジョーデン 1962、オノ 1963、ツアハート [1963]–1976、文化庁 1971、文化庁 1975、基礎I分冊 1978、NHKアク 1985、吉川 1989、NHKことば1 1992、谷守 1992、玉村他 1993、タニモリ 1994、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)

ヨ経由型とヨン直行型の区別もあるし、助数詞の種類によってヨン化には遅い早いがある。有声音で始まる漢語助数詞、無声子音で始まる漢語助数詞、さらに最近で和語助数詞の場合でもヨン化が観察される。なお、和語の助数詞(箱、切れ、組)以外の助数詞の選択にあたっては、1910年代から1950年代にかけての文献に記載の欠落が多い助数詞は変化を見るのに適当とは言えないので、省いてある。

グラフを見てもらおう。縦軸は西暦である。「四銭」から「四組」までの項目の順番は「ヨンの単独使用」の(出版)年でソートしたものである。

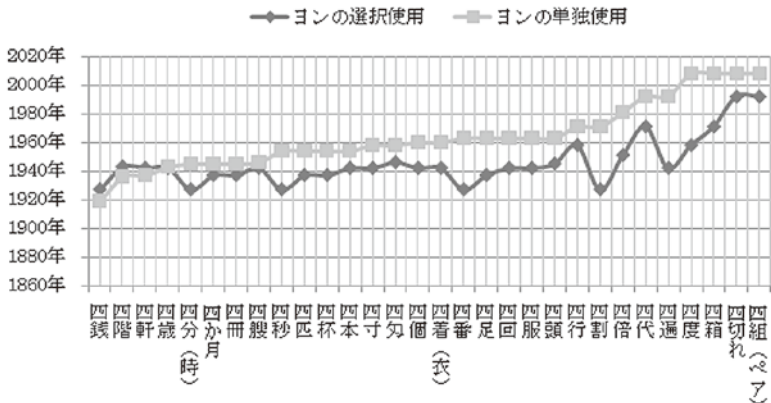


図1 ヨンの選択使用と単独使用

単独使用の年代を基準に並べてみると、大雑把に見て、「四銭」から「四組」の順番でヨン化が進んだと考えられるが、これはどういう順番だろうか。

- ① 無声子音で始まる漢語助数詞 (銭、階、軒、歳、分、か月、冊、匹、杯、

本、寸、個、着、足、回、頭、偏)

- ② 有声子音や半母音で始まる漢語助数詞(秒、刃、番、行、割、代、度)
- ③ 和語助数詞(箱、切れ、組)

「秒」や「刃」や「番」が無声子音の漢語助数詞に混じっていたり、「遍」のヨン化が遅く、有声子音の漢語助数詞に遅れている点などが逸脱として指摘できるが、おおよそ①から③への順番で言語変化が進んだことが図1のグラフから確認できる。有声音で始まる漢語助数詞がなかなかヨン化しなかったのは、ヨ化をしていた漢語助数詞のヨン化が遅れているのに歩調を合わせたという解釈も可能だろう。ヨバンがなかなかヨンバンにならないのだから、同じように、シモンメもヨンモンメにならなかったということである。

「ヨンの選択使用」の時期と「ヨンの単独使用」の時期が逆転している場合がある。十分な発音資料がなかったせいではないかと上で述べたが、近接していることの意味は、ヨン化への「圧力」がとくに高かった場合と解釈できると思われる。そのような例をグラフから取り出すと、「四銭」、「四階」、「四軒」、「四歳」、「四か月」、「四冊」、「四艘」がそうであるが、これらはヨンが使われ始めて、ヨン化への強い変化圧を受けて、すぐに普及し、シという言い方をしなくなったということになる。

グラフで「ヨンの選択使用」が落ち込んでいる箇所は、「ヨンの単独使用」までかなりの期間がかかっており、ヨンの普及を妨げる要因があったか、早期に一部のひとたちや一部の分野などで使われた理由があったかのどちらかであろう。すでにヨ化していたため、ヨン化を進める変化圧が強くなかったためと解釈できるのは、「番」と「割」である。「分」と「秒」については時間表現という共通性があるが、なぜ、シフンやシビョーという言い方が比較的長く残ったか不明である。同様にヨンの普及まで時間がかかったのが「四遍」であるが、理由ははっきりしない。

2.4 ヨン化に先行したヨ化について

シは漢数詞であるが、ヨは和数詞ヨツの助数詞とともに使われる助数詞併用形が元であり、ヨハコ(四箱)のように使われた。かつては和語の助数詞には和数詞を使うのが基本で、ヨフクロ(四袋)やヨキレ(四切れ)としか言えなかった。「四切れ」の出版年調査の結果を出しておこう。

【四切れ】

- ① ヨキレ (ヤマギワ 1942、タカハシ 1945、ブレイラー 1963)
- ② ヨキレ、ヨンキレ (NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005)
- ③ ヨンキレ (ペリー 2008)

発音資料が少ないが、以前はヨキレでヨンキレが新しい言い方であることは確認できる。ヨにはこれとは別に、シの代わりに使われた代用のヨがある。典型的な例をひとつだけあげるなら、「四年」のシネン¹⁶は、ネンは漢語助数詞なので、本来は漢数詞のシを使うべきところだが、早くからヨネンと言われていた。ロドリゲスの『日本大文典』(第3巻、1608)ですでに指摘されている。このヨは漢数詞のシの代わりに使われ、代用のヨと呼んでおけるだろう。このシを使うべきところでのヨ化の現象は、ヨン化よりもはるかに早い。明治期にもシからヨへの言語変化は完了しておらず、引き続きヨ化は進行している。ロドリゲス(1608)では代用のヨの使用例は多くなく、間違っている可能性の高いヨソー(四艘)のほかは、ヨド(四度)、ヨルイ(四類)、ヨリ(四里)、ヨネン(四年)をあげているに過ぎない。当時はヨ化の規則性が明白ではなかったと考えられるが、明治期になってまとまった数のヨ化の例をあげ、漢語助数詞と使われるシがヨになることがあると指摘しているのは、お雇い外国人として最初期の東京大学医学部でドイツ語やラテン語などを教え¹⁷、帰国後にベルリン大学の日本学の初代教授になり、日本語総合教材を出版したルードルフ・ランゲである。ランゲ(1890:64)はローマ字で代用のヨが使われる助数詞をあげているが、意味を書いているので、漢字を補って示すと、ban(番)、dai(代、台)、do(度)、ji(時)、jō(畳)、mai(枚)、nen(年)、nin(人)、ri(里)、

¹⁶ 「四年」がヨネンになる前はシネンだったはずであるが、この発音を実証する資料があるのかどうか分からない。ただし、古い和暦の読みについてはシネンと読むべきというひとが大正時代にはまだいたようで、おそらく、以前の読み方の伝統を引き継いでいるのだろう。『改訂高等小学読本巻三字引』(大正3年、矢島誠進堂)では「建久四年」に「けんきうしねん」とルビを振り、「シ(傍点)トヨム。紀元一八五三年」と解説している。わざわざ説明をしているのはヨネンと読まれてしまうのを訂正したいからか。

¹⁷ 国立国会図書館近代デジタルライブラリーに『東京大学医学部年報』の第4年報(明10)から第7年報(明13)までの所蔵がある。明治10年に東京大学が成立してからの最初の4年間分だが、「外国教授申報抄訳」があり、ランゲの書いた報告の「抄訳」があり、それによると、「独逸学」、「羅甸学」、「地理学」を教えている。丸山國男の「我が国に於ける独逸学の勃興」(『日独交通資料』第三集、日独文化協会、1936)によると、ランゲは明治7年12月10日に東京医学校(東京大学医学部の前身)にお雇い教師として雇われ、明治14年10月30日まで勤めている。

yen (円) である。ランゲも、ロドリゲスと同じように、列挙するだけで、どういふ助数詞で代用のヨが使われるのかという条件の記述は行っていない。やはり、まだ規則的にヨ化していると理解されていなかったのだろうか。もっと後の時代になっても、「四銭」がヨセンにならないことをマツミヤ (1937) は、ヨエンやヨリンと言うこともあるが、ヨセンとは言わないと、個別の事例として述べている。助数詞が無声子音で始まれば、ヨが使えないというほとんど例外のない規則も当時の日本語教育にたずさわるひとにも必ずしも自明のこととして理解はされていなかったようである。

明治期やそれ以前のシとヨとの関係がどうだったか考えるのに適した落語がある。江戸中期に成立したとされる古典落語に「しの字嫌い」がある。プラウト (1904) では日本語の読み物として取り上げられている。主人と賢い召使の話である。賢い召使を困らせようと考えた主人が縁起の悪いシという言葉を使わないというルールの一種の遊びを始め、召使にシカンシヒャクシジューシモン (四貫四百四十四文) の金を渡して勘定させ、いくらかと聞いて、困らせようとするのだが、賢い召使は、ヨッカンヨヒャクヨジューヨモン¹⁸と言ってのけ、ソレデワルケレバとサンガン イッカン、サンビャク ヒャク、サンジュー ジュー、サンモン イチモンと言い直してみせる。予想外の抵抗に会い、主人は、結局、にシプトイヤツダと、シを入れた言葉を使ってしまい、召使に負かされてしまうという話である。落語「しの字嫌い」で分かることは、①江戸時代にはヨンはまだなく、ヨンが使われていないこと、②シのかわりにヨが使われることは一般に理解されていたこと、③通常シをヨに取り換えることができない場合が存在して、そういう場合がヨッカンヨヒャクヨジューヨモンだということ、ということになるだろうか。この召使だが、大量のお金の勘定をやらされ、座り続けたために足がしびれたようであるが、「しびれ」とは言わずに「よびれ」と言ってみせ、説明を求められると、イチビレ、ニビレ、サンビレと、ヒレという架空の助数詞を使い、サンビレの次だとも説明する箇所もあるので、シとヨの同一性については理解されていたと見てよい。

¹⁸ ヨモンという言い方なら、助数詞の語頭が有声音なので、ありうる形であるが、調査した発音資料にはなかった。サトウ (1873) の『会话篇』がシモンになっているし、クルチウス (1857) に「四文銭」が出てくるが、シモンセンである。ヘボン (1867, 1872, 1886) の『和英語林集成』(初版、2版、3版) もシモンセンであるし、『和独対訳辞林』(1877) も「四文銭」の「四」にシのルビを付けている。

2.5 ヨ化の語頭有声条件と音韻同化

ロドリゲス (1608) もランゲ (1890) も代用のヨが使われる場合を列挙するだけで、ヨ化の条件については考えていなかったが、ヨ化した助数詞を観察すると、条件があったことが分かる。

ランゲ (1890) はヨ化する助数詞としてジ (時) やジョー (量) をあげていたが、助数詞の語頭がサ行濁音である。他の発音資料から探すと「四丈」もヨジョーが使われていた。また、ランゲはネン (年) とニン (人) をあげているが、他にも「四男¹⁹⁾」でヨナンが使われた時期があったようである。つまり、助数詞の語頭がナ行音である。ランゲのあげたマイ (枚) はマ行音であるが、メイ (名) もヨメイになっている。ラ行音で始まる助数詞はランゲはり (里) しかあげていないが、「四厘」、「四輪」、「四列」などもヨ化している。ハ行濁音の例はランゲはバン (番) だけであるが、「四倍」、「四秒」もヨ化している。結局、サ行濁音、タ行濁音、ナ行音、ハ行濁音、マ行音、ラ行音で始まる場合にシがヨに変化していることになる。濁音やマ行、ナ行、ラ行に共通するのは有声子音ということである。ランゲは「円」もあげているが、「円」は明治期の資料では当初より一貫してyenと記載されており、母音で始まるのか、[j]の音が語頭に付与されているのかはっきりしない²⁰⁾、他に頻繁に使われた母音で始まる漢語助数詞はなかったが、母音にしてもヤ行子音が語頭に付くにしても有声音であることには変わりがない。有声音で始まる漢語助数詞ならヨ化したのか検討してみると、「円」は母音で始まる漢語助数詞とすれば、ヤ行音やワ行音やカ行濁音がまだヨ化の事例にないことになる。しかし、ワ行音は「四羽」がヨ化している。「ワ (羽)」は本来は和語の助数詞であるが、一般的に漢語助数詞として使われていることはすでに述べた²¹⁾。ヤ行については『NHKことばのハンドブック』(第2版)のかなりの量の助数詞リストにも「夜 (や)」と「役 (やく)」の二つしかなく、調査した文献に見つからなかったことに大きな意味はな

¹⁹⁾ 「四男」はヨ經由型変化でヨン化を完了していると思われるが、出版年調査では発音資料は多くないが、シナン→ヨナン→ヨンナンの言語変化が明確に読み取れる事例である。①シナン、ヨナン (プリンクラー 1897、ルマレシャル 1904)、②ヨナン (グロスマン 1927、常深 1932、同音類音 1941、NHKアク 1943)、③ヨナン、ヨンナン (NHKアク 1985)、④ヨンナン (NHKアク新 1998)。

²⁰⁾ キヨオカ (1946 : 92) はyen is pronounced enと書いており、この頃には[j]の発音はなかったことは確かだろう。

²¹⁾ 逆の場合もあり、「晩」は本来漢語であるが、明治期でも和数詞とともに使われ、ヒトバン、フタババンと数えて和語のように扱われていて、ヨバンという言い方が使われても、これは和数詞のヨと考えられるので、シの代用のヨではないだろう。

さそうだが、カ行濁音で始まる漢語助数詞なら、「月（がつ）」、「学級」、「行」、「グループ」、「合」、「号」がある。「四合」の出版年調査の結果は、①シゴ（コバヤシ [1896]－1908）、②シゴ、ヨンゴ（NHKアク新 1998）、③ヨンゴ（NHKことば1 1992、NHKことば2 2005）で、ヨゴはなかった。「四号」では、シゴ、ヨンゴ（ダン／ヤナダ／エコ 1958、レヴィン 1959）で、ヨゴは見つからなかった。「四行」も、①シギョ（高橋発音 1904）、②シギョ、ヨンギョ（ダン／ヤナダ／エコ 1958）、③ヨンギョ（文化庁 1971、NHKアク新 1998）であり、ヨギョという言い方を支持する発音資料はなかった。しかし、国語調査委員会（1916：70）は「十四行」の「四」はまたはヨとしているので、ジュヨギョという言い方はあったらしい。「四行」にヨギョという言い方も一時期使われていたかもしれない。発音資料が十分でないことも追及を難しくしているが、カ行濁音で始まる漢語助数詞には、ヨ化を遅らせるなんらかの理由があった可能性がある。また、シゴから一気にヨンゴになっているらしいのは、ヨ化を経ないで、ヨン化を早める理由があった可能性もあるだろう。ただし、カ行濁音であれば絶対にヨ化しなかったわけではないことは地名の「四郷」の調査で分かる。シゴ以外に消失地名でヨゴという村名の例が岐阜県と三重県にあったからである（『消えた市町村名辞典』、東京堂、2000）。

さて、ヨ化の条件として助数詞の語頭有声音という条件は、調査した発音資料には幾つか例外が見つかっている。ロドリゲス（1608）のヨソー（四艘）、タカハシ（1945）のヨカイ（四回）、ヨチャー（四挺）、ヨフィート（四フィート）、グロスマン（1927）のヨタン（四反）やヨヒキ（四匹）（どちらも反物の数量単位）である。NHKのアクセント辞典の1985年版は「四クラス」に「ヨンクラス」以外に「ヨクラス」という言い方も認めている。ペリー（2008）も「四階」に対してヨンカイのほかにヨカイをあげている。プラウト（1904）では「十四歳」がジュヨサイになっている。しかし、こうした例外事例は他の発音資料の中で孤立した指摘になっている点はまず指摘しなければならない。ロドリゲスはヨソーとしているが、やや時代をくだるが、17世紀中葉のコリヤードは「～艘」の言い方を詳しく説明しているところで、「四艘」のところは何も触れておらず、規則的な読み方、つまりシソーと発音するものと考えていたと見られる。出版年調査の結果でも①シソー（アストン 1869、アストン 1888、サトウ 2 1879、コバヤシ [1896]－1908、アカダ／サトミ 1903、ホバ・サトウ 3 1904、ウエインツ 1904、国語調査委 1916、タカハシ 1945）、②シソー、ヨンソー（ヤマギ

ワ 1942、長沼 1951、ダン／ヤナダ／エコノ 1958)、③ヨンソー(マツミヤ 1946、オノ 1963、NHKことば1 1992、NHKことば2 2005)になっており、明治以降もシソーと記述される例がかなりあるが、ヨソーはない。タカハシ(1945)のヨカイも「四回」を他にこういう発音として記述している資料はない。出版年調査の結果は、①シクワイ(赤田／里見 1911、ラゲ／オノ 1905)、②シカイ(国語調査委 1916)、③シカイ、ヨンカイ(ヤマギワ 1942)、④シカイ、ヨカイ、ヨンカイ(タカハシ 1945)、⑤ヨンカイ(オノ 1963、文化庁 1971、文化庁 1975、基礎 I 分冊 1978、三省堂アク 2 1981、NHKことば1 1992、谷守 1992、玉村他 1993、NHKことば2 2005)である。このような場合、著者の誤解か、判断が間違っていた可能性がある。また、例外事例を指摘している著者が他の例外事例も指摘しているタカハシ(1945)のような場合がある。ヨカイ(四回)、ヨチョー(四挺)、ヨフィート(四フィート)が同一個人が指摘しているが、このような場合については、当該の項目に関して著者の判断が独特であり、信頼性に問題があると判断するのもやむを得ないだろう。グロスマン(1927)があげているヨタン(四反)やヨヒキ(四匹)など、あるいは繊維・布取り引きの際の専門語としてこのような言い方があったかもしれない。とはいえ、このような例外の孤立事例は、誤解や間違いでなくとも、日本語の数詞・助数詞の主流がこのような傾向と発音だったというわけではないはずである。主流の流れとは別の傍流を考えることになるだろう。

ところで、ヨをとる漢語助数詞に見られる語頭有声条件を規則性として記述しているのは、マーティン(1954、1975)であるが、歴史的変化は考慮に入れていないか、誤解している。マーティン(1954)とマーティン(1975)では微妙に異なる説明であるが、マーティン(1954:183)では語頭有声条件のもとでヨンがヨの形で実現するという説明をしているのに対して(Before some counters beginning with a voiced sound, the counter yon '4' appears in the form yo-: yo-en '4 Yen', yo-nen '4 years', yo-ji '4 o'clock', yo-jikan'4 hours', yo-jo '4 mats'), マーティン(1975:770)では語頭有声条件での撥音の脱落として説明している(When attached to counters that begin with a voiced sound, yon often (but not always) drops the final -n: [...])。どちらの説明も大同小異であるが、こういう説明の仕方は、共時的な規則という点では間違っていないとも考えられそうであるが、「四時」に対してヨンジという語形がヨジの前にあったことになってしまい、「四円」に対して現在でも時々使われるヨンエンという語形がヨエンの先にあり、それがヨエンに言語変化したかのように説明してしまうことになる

わけで、新しい語形と古い語形の順番が事実と反する文法記述になってしまうだろう。

語頭有声条件があったことは間違いないと思われるが、なぜ有声音で始まる助数詞がヨ化したのだろうか。筆者の考えは、ヨ化は、助数詞の語頭が有声の場合にシがヨに移行することで、有声性の音韻同化を利用して、シの不都合さを回避した現象であり、音韻同化によってヨ化の語形が安定したのではないかというものである。ヨは少なくとも和数詞の助数詞併用形としてはヨ・ハコ（四箱）のように既存の語形であり、自由に同じ数詞として使えたわけではないが、「四」にはシとヨという同じ意味の複数の語形が存在していた。そこへ、助数詞の語頭が有声であるため、有声の音で始まるヨの方に性質をそろえようとする音韻同化という変化が起きたと説明できる。選択肢の中を移行するような逆行同化なら比較的容易に実現したのではないかと考えられる。「四男」の場合で逆行の音韻同化のイメージを説明すると、ナンのナとシとヨでは、ナと同様に有声音で始まるのはシではなく、ヨである。イメージしやすいうちに有声音で始まるという共通の特徴を持つヨとナを囲み文字として図示すると、以下のよう

[四男] ①シナン ⇒ ②シ \square ン ⇒ ③[シ→ \square] \square ン ⇒ ④ヨナン(⇒ ⑤ \square ンナン)

もともとシには不都合な点もあり、シからヨへと移行することで、シの不都合さを解消し、また、音韻同化がヨナンという語形を一時期ではあるが、安定させたということになるだろう。

シからヨへの変化が音韻同化であれば、音韻同化を受け付けにくい語はヨ化しにくいはずであるが、事実、外来語はたとえ語頭が有声音であってもヨ化しなかったか、ヨ化に対して強く抵抗したと考えられる。外来語が一般に音韻同化しにくいことは、連濁も起こらないことにもあらわれている。たとえば撥音で終わる数詞のサン（三）は助数詞を連濁させる傾向が強く、その傾向は現代より以前の方が強かった。しかし、サンに続く外来語の助数詞が連濁することはない。

① 3 ケース / * 3 ゲース

② 3 トン / * 3 ドン

外来語は音韻同化を受け付けない傾向を持ち、連濁もヨ化もしないと説明できる。先にあげた「ヨフィート」や「ヨクラス」という言い方が使われたことは間違いでないにしても、少なくとも長続きせず、安定しなかったのは、外来

語がヨ化を受け付けにくい傾向の例外であるとも言えるが、長続きも安定もしなかったことは、外来語が音韻同化を受け付けにくいことを支持する証拠という二面性を持つだろう。

一方、外来語の助数詞もヨン化の言語変化はしているが、それは、ヨン化は音韻同化と関係して進行した言語変化ではなく、基本数詞がシからヨンに変わったことによる言語変化であると解釈できる。したがって、外来語の助数詞に対してもシからヨンへの変化は起きたわけである。

言語変化の途上には主流の変化以外にそれなりに逸脱事例が生じるようだ。「四年」は現代でもヨネンが標準的だと思われるが、ヨン化の言語変化の流れの中で、ヨネンという言い方は一時的にかなりの勢力を持ったようである。ヨネンとヨネンの両方を認める発音資料が戦後複数見つかるからだ（ブロック／ジョーデン：1945、GHQ：1946、ダン／カナダ／エコノ：1958）。同様に、「四万」のヨ化の事例を記録する資料は2点（マツミヤ 1946、長沼 1951）しかないが存在する。しかもこの2点の文献は同時にヨンマンの言い方も認めているので、ヨマンという語形は短期間存在したかもしれないが、一気にヨンマンへと変化したと解釈できるだろう。

3. 漢数詞のシ、和数詞のヨ、シの代用のヨ、和製漢数詞のヨン

これはのちに詳しく考察する。「四」の各種の数詞で残っているもうひとつのヨンの由来や歴史については、一般にはあまり知られておらず、和数詞の助数詞併用形であるヨとの類似から和数詞だとされることもあるようである。ヨンをヨと同様に和数詞の仲間と見る考え方が一般の人だけでなく研究者の間でもある程度普及している考え方なのである。たとえば、玉村（1986）では「ヨツ・ヨ（ン）」をひとまとめにして和語系としているし、室山（1986）も、ヨ・ヨンを「和語系のもの」、シを漢語系のもものと分類している。添田（2006）は10から1に逆順に数えるときや電話番号の読み方を論じ、ヨンやナナが出てくるのを「和語読み」と説明している。しかし、筆者はヨンは当初より和製漢数詞とみなすべき数詞であり、漢数詞の機能をもって使われだした数詞であり、「和語読み」つまり訓読みと捉えることは適切ではなく、ヨンを和数詞と考えるのは間違いであるという見解である。最大の理由は、和数詞と和語、漢数詞と漢語の結合規則（傾向）である。ヨンが和数詞であれば、和語とともに使われるのが本来の使い方であるが、ヨクミのような言い方は最近認められた言い方

であり、当初のヨンの使い方ではない。ヨンは和数詞ヨの撥音便と解釈することができるが、ヨンの語形の類似は和数詞のヨだけではなく、漢数詞サンとの類似もある点に注目したい。つまり、ヨンという語形は漢数詞サンとの類似性のゆえに選択されたと考えられる。田野村（1990：195）がヨンについて『さん』からの類推だろうか」と書いているが、筆者も同じ考えである。最初から漢数詞のサンと同じように機能することを目的に創造された語形であるなら、ヨンは和製の漢数詞と解釈するのが妥当であろう。ヨンは当初より代用のヨとは異なる性格を帯びていたことは見逃せない。すでに漢語助数詞と使われていた和数詞起源のヨであるヨバン（四番）やヨマイ（四枚）のヨがヨンに最初に変化していない。単独の数字のシがヨンに変わり、助数詞と使われたシがヨンに変わり、その後、ヨがヨンへと変わり始めるという言語変化をたどっている。つまり、ヨンは漢数詞のシの代わりに使われ始めたのであり、和数詞のヨや代用のヨの代わりに使われ始めた数詞ではなかったことなる。ヨンの普及期の文献にも助数詞と使う場合にヨが使われることが多くなるが、特に漢語（の助数詞）とともに使われる場合にヨンが使われることがあると述べているマツミヤ（1935：24）の証言（[...], when the character 四, four, is connected with Auxiliary Numerical Words, the pronunciation yo is more frequently used than shi, but sometimes yon, especially when used with Chinese words [...].）が重要である。ヨンは当初より漢語とともに使われ始め、当時の使い方は和語と親和性の高い和数詞としての性格ではなかったことになるだろう。したがって、ヨンを和数詞や和数詞同等とみなす考え方は言語変化の実態にそぐわない。

ヨンは和製漢数詞というのが筆者の解釈だが、それでは、なぜサンボンと言うのにヨンホンなのかというような、サンとヨンの連濁のふるまいの違いについての説明が必要になってくるだろう。撥音で終わる数詞（ナン、サン、セン、マン）は連濁を引き起こすが、ヨンでは連濁が起こらないとマーティン（1975：771）は述べているが、当然の指摘であり、ヨンと他の基本数詞との重要な違いである。これは、ヨンの成立が明治以降であり、普及はもっと遅く、そのことが関係していると思われる。田野村（1990：215-216）でもヨンがサンとことなり、助数詞との組み合わせにおいて濁音化率や半濁音化（パ行音化）率が低い理由については、ヨンという言い方の成立が新しいことによるものと推定しているが、濁音化については筆者の考えと同じである。しかし、半濁音化率もヨンの方が低いと田野村は述べているが、これは違うと思う。ヨンと助数詞の組み合わせにおいてもかなり多くが半濁音化する。それどころか、かつてはヨ

ンの方が半濁音化の傾向が強かった可能性もある。マーティン（1954：183）に yom-pyaku, yom-pon, yom-pai, yom-piki のような言い方を使う一部のひとがいるとあるが、そうなら、サンは sam-byaku, sam-bon, sam-bai, sam-biki であったわけだから、サンよりもヨンが半濁音化の傾向が顕著だったことになるだろう。

また、サンでは、20世紀以降、撥音の後での濁音化の音韻傾向が廃れはじめていることは、濁音化の解消という言語変化も起きていることから分かる。ハ行音の助数詞では清音化せずに半濁音化する傾向も出ている。ハ行濁音からハ行清音に戻るのか、ハ行半濁音に変わるのかは、発音資料となる文献の数が多くなく、正確に判断するのが難しいが、半濁音に変わった例があることは確かである。今では使う機会の減った粉薬などの助数詞「服」を使った「三服」（粉薬を数える助数詞）は確実に連濁から半濁音化に変わっている。図2は1903年（明36）出版の第一期国定教科書の『尋常小学読本』（巻一）²²からであるが、「コグスリ」つまり粉薬²³の数を国定教科書として全国の小学生に教えている箇所である。「三服」がサンブクになっていることに注目してもらいたい。また、「四服」がシフクになっている。このように、「三服」は、古くは、サンブクと連濁したのである。出版年調査の結果は以下の通り。

【三服】

- ① サンブク（コリヤード 1632、コバヤシ [1896]—1908、尋常小学読本 1903、ラゲ / オノ 1905、マックガバン 1920）
- ② サンブク、サンブク（ヤマギワ 1942）
- ③ サンブク（オノ 1963、マックレイン 1981、NHKことば2 2005）

上の②のヤマギワ（1942）で初めて、サンブクという半濁音化した言い方が登場して、③になると、サンブクだけになり、サンブクという連濁する言い方が消えてしまっている。

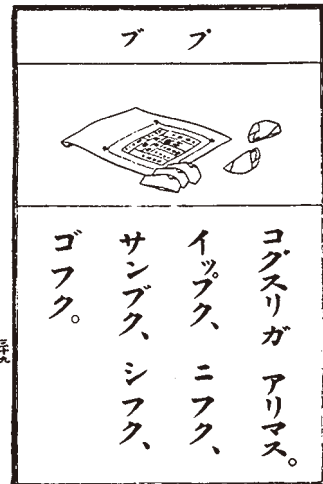


図2 明治期の粉薬の数え方

²² 1904年（明37）から基本的に国内では同一の教科書を使う国定教科書の制度が始まり、その最初の小学校の国語の教科書である。

²³ わたし自身はコナグスリと言うが、明治期にはコグスリという言い方しかなかったらしい。維新直前の幕末から明治中期にかけてのヘボンの『和英語林集成』の初版から3版までコグスリしか見出し語になっていない。明治44年出版の金澤庄三郎の『辞林』も同様である。

要するに、サンブク→サンブクと変化したわけである。

他にも撥音の後で連濁していた語が連濁を解消した例をヘボン（1867）で探すと、かなり見つかる。『和英語林集成』は発音表記をローマ字でおこない、カタカナは当時の日本語の仮名遣いに基づいて「隣町」のリンチョーは「リンチャウ」のように書いているが、ここでは発音表記としてのカタカナで『和英語林集成』の発音を示し、矢印の後に現在の発音を示しておこう。

幕末

現代

| | | |
|------------------|---|-------------------|
| ① 巖（岩）石……………ガンゼキ | ⇒ | ガンセキ |
| ② 元服……………ゲンブク | ⇒ | ゲンブク |
| ③ 現世……………ゲンゼ | ⇒ | ゲンセー |
| ④ 三世……………サンゼ | ⇒ | サンセー |
| ⑤ 人夫……………ニンブ | ⇒ | ニンブ ²⁴ |
| ⑥ 難所……………ナンジョ | ⇒ | ナンショ |
| ⑦ 顛（転）倒……………テンドー | ⇒ | テントー |
| ⑧ 紛失……………フンジツ | ⇒ | フンシツ |
| ⑨ 凡夫……………ボンブ | ⇒ | ボンブ |

明治期以降に連濁を解消する例がかなりあるが、連濁一般が解消する傾向にあったというわけではなく、撥音後の強い連濁傾向が解消する傾向にあったということで、撥音後でなければ、ヘボン（1867）の当時は連濁しなかった語で、その後連濁するようになった語彙も存在する。たとえば、『和英語林集成』では「片側」はカタカワであるし、「下山」はゲサンである。これらはその後連濁している。

上の『和英語林集成』の②「元服」、⑤「人夫」、⑨「凡夫」の例でも連濁が解消して、半濁音化しており、おそらく、ハ行音の場合には清音は複合語の後部では現れず、清濁の対立ではなく、濁音と半濁音が対立するという傾向に明治期以降もあつたと見られる。数詞と助数詞の場合で連濁の解消と半濁音化の例を漢語の助数詞からみつけるのは難しいが、和語の助数詞も最近では漢数詞をとるようになってきていて、「三箱」について考えるなら、連濁の解消と半

²⁴ 「人夫」の現代の言い方をここではニンブとしたが、現代の国語辞典で確認できる言い方であるが、「人夫」や「人足」という言い方は現代では使われなくなっていて、今の大学生などは知らない語だろう。

濁音化を確認することができる。ミハコがミパコにはならないが、サンパコからサンパコへと変化してきているからである。数詞をサンと読む場合だけに限っているが、①サンパコ（オノ 1963、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998）、②サンパコ、サンパコ（NHKことば2 2005）、③サンパコ（ペリー 2008）のようになっており、以前はサンパコしかありえなかったのが、最近ではサンパコも認められるようになっている。もちろん、サンのあとの助数詞が連濁する場合はサンバイ（三杯）のように現代でも多数あるが、古い規則が残ったもので、連濁の解消や半濁音化への変化をまだ受けていないものと解釈できるだろう。撥音後の連濁や半濁音化については、従来から日本語史上の関心から追及されており、濱田（1983）、迫野（1989）、浅田（2000）がある。h音がp音に変化したという考え方のほかに古いp音が保存されたという考え方もあったようである。明治時代以降についてみれば、『和英語林集成』以降に言語変化が確認できる「元服」「人夫」「凡夫」などでは、もともとb音だったものがp音に変わったことが明らかで、h音がp音に変わったわけではないし、古いp音が保存された場合でもない明白な事例ということになるだろう。

以上のことを踏まえると、ヨンをサンと同等の漢数詞と見なすことには何ら

表3 サンとヨンでほぼ共通する半濁音化

| | 派 | 波 | 敗 | 泊 | 箱 | 発 | 犯 | 版 | 班 | 服 | 分 | 編 | 歩 | [ほ] |
|----|---|---|---|---|-----|-----|---|---|---|---|---|---|---|-----|
| サン | p | p | p | p | b/p | p | p | p | p | p | p | p | p | p |
| ヨン | p | p | p | p | - | p/- | p | p | p | p | p | p | p | p |

問題は存在しないと考えられる。ヨンに後続する助数詞は基本的に連濁しないが、それはサンの明治期以降の性格と大差はないと思われるし、半濁音化については、かなり共通しているからだ。NHKことばのハンドブック第2版の数詞・助数詞の表で語頭がハ行音の助数詞について、サンかヨンに後続する助数詞が半濁音に変化した例をすべて取り出すと表3のようになる。なお、半濁音化は本来は漢語助数詞に生じる音韻変化であったかもしれないが、「箱」についてもサンパコのような言い方が生じているので表に入れてある。

なお、現代日本語においても撥音後のハ行清音は例が少なく、「万年筆」と「鉛筆」を比べると、「万年筆」が [[[万] [年]] 筆] のように単純ではない語構成を持つ点に清音のままヒツが使われている理由があるという説を迫野（1989：823）は紹介している。助数詞とサンやヨンの使い方を観察すると、「平方メートル」の場合はサンでもヨンでも清音のままなのは、「平方メートル」が複合助数詞であるためと説明することが可能かもしれない。しかし、ヨンの場合は、

サンとはことなり、半濁音化されない事例がハ行清音で始まる単純な助数詞でかなり見つかる（「四杯」、「四匹」、「四票」、「四俵」、「四遍」、「四本」など）。おそらく、これはヨンの成立がサンと比べて新しいため、以前のような撥音後の連濁の傾向がなくなったためだと考えられる。

4. ヨ化、ヨン化への言語変化の理由とシをめぐる状況について

シがヨ経由型変化とヨン直行型のふたつの変化でシではない語形に変化したのは、どういう状況で、なぜそのような言語変化が起きたか考察する。ここでは、まず、状況と理由について諸説をコメントしながらまとめて、その後で、理由についての筆者の考えを述べることにする。

4.1 ヨ化やヨン化をうながした数詞の使用状況

ヨ化の始まりは古く、ロドリゲス（1608）にも記述されているが、当時の事情については明確なことは分らない。20世紀の事情なら、ヨ化やヨン化がどんな場合に起きていたか使用状況についての記述はかなり一致しているので、おそらくその通りであったと思われる。金額表現と電話番号に使われ、商売や電話での会話という場面での使用である。数詞の説明で、代用のヨやヨンの使用状況を明記しているものに、電話における伝達（鈴木 1906、ローマ字社 1928、松宮 1937、キヨオカ 1946）や金額表現（鈴木 1906、三宅 1943）がある。たとえば、鈴木は「或特別（電話番号或は帳簿計算など）の場合に、数量を明瞭に誤解なく聴きとらしめんが為に、殊更に變則なる用法をなすことあり」と書いて、「本局ひと千ふた百五十なゝ番（本局一千二百五十七番）」と「よんじうきうせん（四十九銭）」の用例をあげている（p.65）。竹内（1907）も説明はしていないが、用例は金額表現と電話番号の二つの場合である。同様に、使用状況として具体的に明記していなくとも例文が金額表現や電話番号になっている場合が大槻（1917）である。『口語法別記』の「数詞」の部で聞き違いを避けるための言い方としてヨン・ナナ・キューをあげているが、例文は「二百四十番」を「ふたひやくよんじうばん」と言う例（おそらく電話番号であろう）、「四百七十九圓」を「よんひやくなゝじうきうえん」と言う例である。バランティン（1949）はヨンについては明記していないが、フタやナナについて、商業関係や電話の通話の二つの場合をあげている。しかも、例としてあげているのは、Moshi, moshi. Kudan no kyūsen futa hyaku nanajū yomban negaimasu. であり、ヨンも

含まれている。また、ヨンについてではなく、クとキューについて、三宅(1943: 38)は「計算用語としては概ね九(く)を九(きう)におきかへてつかふ」と書いている。

厳密に考えれば、電話での通話に使われるということと電話番号の言い方で使われるということは別の事柄であるが、以前は、電話番号を交換手に言って取り次いでもらっていたわけであるから、電話での通話でもっとも使われた数詞の使い方は電話番号であったはずである。通話品質の高くなかった電話での通話に聞き取りやすさが要求されたと考えられるし、聞き間違いが重要な意味を持つ金額の伝達においても同じように聞き取りやすさが要求されたのだと考えられる。金額表現と帳簿計算でも使用状況にあいまいな点が残るが、正確さが要求される金額の表現の伝達においてヨンの使用が始まったということは間違いないだろう。

金額表現がヨ化やヨン化で先行したことは、どの時期を選ぶかによって見えにくい場合もあると思うが、適当な時期の適当な文献を選べば、十分検証できることである。たとえば、1945年頃の状況を考えるならば、ブロック/ジョーデン(1945)は、単独の数字については、4(シ、ヨン)、14(ジューシ)、40(ヨンジュー、シジュー)だが、4円(ヨエン)、4銭(ヨンセン)、14円(ジューヨエン)、14銭(ジューヨンセン)、40円(ヨンジューエン)、40銭(ヨンジッセン)としており、独立用法の数字ではシを認めながら、金額の言い方ではシをまったく使っていない。金額の表現でヨン化が先行したことを裏付ける記述だろう。

4.2 ヨ化やヨン化の理由

まず、通説を説明しよう。漢数詞ニ・シ・シチ・クが漢数詞が期待される場所でフタ・ヨ・ヨン・ナナ・キューに変化することは早くから注目され、理由についても述べられてきている。シからの言語変化と、ニ・シチ・クのフタ・ナナ・キューへの変化の理由と共通している部分もあり、先行研究の記述も必ずしもどの変化についての考察なのか限定できない場合がある。著者の見解ではなく、日本人の説として述べている場合もある。ここではあまり煩雑にもなるので、細かく区別しないでまとめておく。まず、シを使わない理由として「死」への連想²⁵の回避は古くからあげられている理由である(ロドリゲス 1608、

²⁵ シチからナナとクからキューへの変化についても不吉な語(「苦」や「失」)への連想の回避を理由にあげるひともいる。

チェンバレン 1888、ラゲ／オノ 1905：43、サンソム 1928：83、ヤマギワ 1942、バラントイン 1949、アブラハム／ヤマモト 1950、レヴィン 1959、阪田 1995)。ロドリゲスは「四つを意味するXi (四) は或語とは一緒に使はれない。それは死とか死ぬるとかを意味するXi (死) の語と同音意義であって、異教徒は甚だしく嫌ひ、かかる語に接続した四つの意のXi (四) はひびきがよくないからである。従って、その代りに‘よみ’のyo (よ) を使ふ。」(土井忠生訳、p.766)と書いている。ロドリゲスのヨ化の例はすでに述べたように多くなく、たとえばヨパンをあげていないので、1608年までの頃は語頭が有声音の漢語助数詞でもシのままのものが多かったと推定され、助数詞が有声音で始まればヨ化を起こすという規則性も明確ではなかったであろう。したがって、「死」への連想以外の理由は見つけるのが難しかったと思う。しかし、死への連想でシからの言語変化を説明するのは現代まで見られる説明のしかたであるが、シニンが早くから使えなかったことは説明できても、シパンが明治期でもこの語形がかなり使われていたこと、また、運がよいという意味だったシアワセが幸福の意味で一般化したのは明治以降のことであることを考えるだけで、シが「死」と通じ、不吉だからという理由は一般性を持ちえないことが分かる。ヤマギワ (1942：102) はヨ化やヨン化の理由としてやはり「死」への連想をあげている (The use of *yo* (*yom*, *yon*) in place of or alternative to *shi* is explained by the fact that *shi* is a homonym for the word for *death*.)。ヨ化やヨン化がかなり進んでいた1940年代に「死」との同音だけを理由にあげるヤマギワの説明は伝統的な解釈を再現しただけとしか思えない。また、「死」への連想説では、すでにヨ化している場合のヨのヨン化の言語変化の説明にはまったくならないことを確認しておきたい。「死」への連想を避けるという理由をあげる場合でも、自説というよりは日本人の説として紹介するというふうに距離を置いた記述をしているのがバラントイン (1949) である。

聞き取りが困難という理由もよくあげられている (大槻 1917、アブラハム／ヤマモト 1950、阪田 1995)。とくにシとシチの区別が困難なことがヨンやナナへの変化の原因として注目されている (アブラハム／ヤマモト 1950、キヨオカ 1946、レヴィン 1959、玉村 1986、柳田 1991)。一方、ヨン・ナナ・キューの発音が明瞭であるという指摘も見られる (レヴィン 1959)。

また、聞き取りではなく、発音が困難という指摘もされることがある (イノウエ 1958、吉川 1989、阪田 1995)。イノウエ (1958：31) は、ヨやヨンやナナやキューが代用されるのは、発音の難しさか明瞭さの欠如を回避するためと

書いている (Yo (or yon), nana and kyū are often used as substituted words for 4, 7 and 9 to avoid difficulty of pronunciation or lack of clarity.)。しかし、シチやシの発音が困難だからナナやヨンに変わって、シチやシと語頭の子音以外は同形のイチやニは発音が容易だから変化しないということになるのだろうか。発音困難説は具体的にどういう点で発音が困難なのか説明がないと説得力がないと思う。

同音語の多さ (バランタイン 1949) や語形の短小性 (玉村 1986) は比較的新しい見方であるし、この二つは相関関係もありそうだ。聞き取りやすさや明瞭さ・不明瞭さとも関係していることは容易に想像できる。

これまでの説をふまえて、有力だと筆者が考えているヨ化やヨン化が起こった理由は、①シでは語形が類似しているため聞き取りが困難という説、②語形短小説、③アクセントとも関連した母音無声化説の三つを中心とした考え方である。

まず、①の語形の類似性であるが、玉村 (1986) は詳細を説明していないが、「シ」と「シチ」を「きわめて近似した語形」としている。シとシチが音声学的に似ている語形であることはかな書きでははっきりしないし、ローマ字でshiとshichiやsitiと書いてもはっきりしないと思われるが、発音記号で [jitʃi] と書くか、シtシと表記すれば、シチとシの紛らわしさが理解できる。要するにふたつの [ʃi] やシのあいだにtがあるだけの音形がシチなのである。つまり、シチは先頭でも末尾でも聞き落とすとシになってしまうということである。シチの場合は最初の母音が無声化して、1拍めにアクセントが無いことを考えると、前半が聞き落とされる可能性が大きいように思われる。

語形の短小さということでは1拍の数詞すべての問題であるが、ニヤゴはシヤクに比べて問題が大きいとは思われない。もちろん、ニにしてもフタジューのような言い方も使われることがあるし、量をあらわす「五合」がゴンゴーになったというのはロドリゲス (1608) でも指摘されており、1拍であるがゆえの不明瞭さはニヤゴにもある程度は共有されていると思われる。1拍の数詞でもニとシは頭高アクセントだったようだが、ゴとクは古くは単独で平板型アクセントだったと言われている。三宅 (1943: 38) は「大体五十歳以下の年層」ではゴヤクは上型 (頭高アクセントのこと、三宅は平板型アクセントを下型と呼んでいる) に発音するのが普通になったとして、理由として、「下型に発音するよりも上型に発音する方が、比較的に誤りなく聴き取ることができる」といふような長所もあるところから、今日では、これをゴ・クの下型に保持してゆか

うとしても、恐らくは不可能に近いと言へるまでの状態になつてみると考へられる」としている。ゴヤクの場合、アクセントのない平板型アクセントから頭高アクセントに変わる方法で明瞭さは増えたり、クの場合はアクセントがあれば母音無声化しない傾向が出てきたであろう。とはいえ、アクセントの頭高化は、数詞は複合すると、アクセントパターンが変わるので、単独では頭高アクセントであっても、助数詞との組み合わせや複合数詞において頭高アクセントを維持することはできないことにも注意する必要がある。

表4は、1から10までの日本語の数詞の語形上の問題点を考えてみたものである。得点が高いほど音声言語の数詞としての欠点大きいという意味である。シとシチの類音性的問題は個別の問題であるので表では考慮していないが、シとシチにとっては重要な欠点であるだろう。シチは母音無声化も起こるが、2拍なので、その点が大きな問題だとは思われない。やはり、シとシチが混同しやすいという点に問題があるのではないだろうか。イチやハチが助数詞と使われる場合、イチサツがイッサツへと変化し、促音便によりチの母音の無声化を解消し

表4 数詞の語形上の欠点を得点化してみる

| | 1拍 | 母音無声化の可能性 | 平板型アクセント(単独) | ×の個数 |
|------|----|-----------|--------------|------|
| イチ | - | × | - | 1 |
| ニ | × | - | - | 1 |
| フタ | - | × | - | 1 |
| サン | - | - | - | 0 |
| シ | × | × | - | 2 |
| ヨ | × | - | - | 1 |
| ヨン | - | - | - | 0 |
| ゴ(旧) | × | - | × | 2 |
| ゴ(新) | × | - | - | 1 |
| ロク | - | × | - | 1 |
| シチ | - | × | - | 1 |
| ナナ | - | - | - | 0 |
| ハチ | - | × | - | 1 |
| ク(旧) | × | × | × | 3 |
| ク(新) | × | - | - | 1 |
| キュー | - | - | - | 0 |
| ジュー | - | - | - | 0 |

ているという解釈もできるし、母音無声化の可能性どころか、完全に母音が消失して、促音便化しているという解釈も可能だろう。かつてシチもこのような方法があり、今ではシッポー(七宝)ぐらいしか残っていないが、促音便化は以前はかなり使われていたようである²⁶。廃れた理由は、シッではシとの区別がいよいよ難しくなったためだったかもしれない。ニがフタに移行したとは言

²⁶ 『日葡辞書』(1603)には「七宝」以外に「七書(Xixxo)」、「七星(Xixxó)」、「七世(Xixxe)」、「七珍(Xicchin)」がある。

えないのは、フタでは母音無声化もあり、ニとくらべて格別有利な語形ではないためと解釈できるだろう。

なお、「四台」や「四代」のヨダイがヨンダイに変わるヨのヨン化は本来漢数詞シを使うところに和数詞のヨを代用として使うという例外の解消と見なしうるが、ヨ化した時点で、シの抱える問題点（シチとの類音性）は解消しているので、和・漢混交の不統一の解消という理由が言語変化のそれほど強くない推進力になっていると考えられる。現在は、「箱」などの和語の助数詞に対してもヨン化が進行中であるが、これもヨが不安定だからという理由ではおそらくなく、和数詞のヨと（和製）漢数詞のヨンと二つあった数詞をヨンへ統一するという意味があるものと思われる。拍数が短かすぎることが原因だとすれば、ミフクロの「三袋」がサンフクロに変わっても（2008年に静岡大学の学生38人にどちらを使うか聞いたところ、サンフクロ：33人、ミフクロ：2人、両方：3人だった）、フタフクロの「二袋」は絶対にニフクロには変化しないはずであるが、ニフクロへの傾向も強まっているようなので、日本語の数詞を統一し、和数詞の廃止への変化がすでに始まっているのだろう。

なお、表4の試案では、数詞が単独で平板型アクセントかどうかだけを問題にしているが、ゴトクのアクセントの変化で述べたように、数詞は助数詞と結び付くと、数詞部分からアクセントを失うことがあるので、シは単独ではアクセントがあっても、助数詞と使われれば、アクセントを失い、さらにシの欠点が大きくなる場合があるだろう。

5. まとめ

これまでに起きたヨ化とヨン化の言語変化は図3のようにまとめられる。最初に起こった言語変化はヨ化であるが、これはゆっくり進行し、語頭が有声音の漢語助数詞で起きた変化である。20世紀中ごろまで続いたと思われるが、語頭が有声音の助数詞がすべてヨ化したわけではなく、最後までヨ化しなかったものもあった。

ヨ化の次に起きた言語変化はシのヨン化であるが、まずは独立用法の数詞のヨン化が1910年から1950年にかけて起こったと考えられる。助数詞併用形の数詞のヨン化に先行したと考えられるが、独立用法の数詞のヨン化のきっかけとして一部のひとたちがヨンバンやヨンジュエーエンなどを使ったことだった可能性はある。

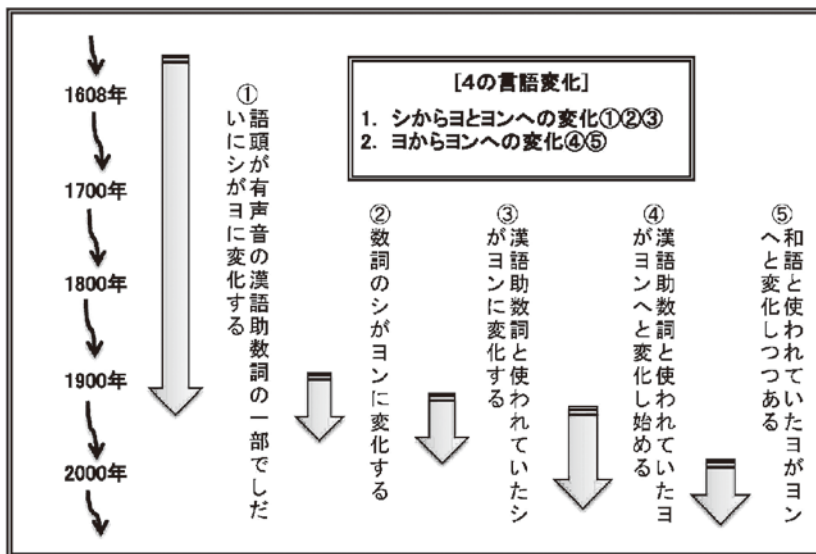


図3 シ⇒ヨ⇒ヨンの言語変化（まとめ）

数詞のヨン化に引き続いて、20世紀中ごろから起きているのは三つのタイプのヨン化（図3の③④⑤）である。漢語の助数詞と使われる数詞の「四」ですでに代用のヨに変化していたものがヨンへ変わる変化が始まったが、始まっていない助数詞もあるし、ヨ化によってシの不都合な点はある程度解消しているためだと思われるが、変化の必然性はあまり強くなく、ヨバンとヨンバンのようにヨン化が完了していない助数詞も多い。ふたつめのタイプのヨン化はシからヨンへのヨン直行型のヨン化である。漢語助数詞と外来語で起きている。語頭が有声音でない漢語助数詞では基本的にヨ化がおきなかったし、理由は不明であるが、ヨ化しなかった「四合」のような有声音で始まる漢語助数詞もあった。外来語は連濁もしないし、ヨ化もしなかった。これらの助数詞では一気にヨン化した。ヨン化は、基本数詞がシからヨンに変わったことによるものと考えられ、音韻同化ではなく、進行は早く、すでに基本的に完了してしまっていると考えられる。

ヨン化の最後のタイプは、明確にいつからかは特定できないが、比較的最近始まった和語助数詞におけるヨン化である。発音資料の調査結果では、ヨン化している場合でも、ヨハコとヨンハコのように、ヨンと和数詞のヨが併用され

ている状態が最近まで続いているが、現代の大学生などでは、既にかかなりの程度ヨン化が完了しているものと筆者は推定している。

本稿ではシからヨやヨンへの変化年代についても考察したが、言語変化の時期についてはあいまいな記述しかできなかった。それには様々な理由がありそうだ。外国語学資料の場合、外国人のとらえた日本語が急進的であったり、時代遅れである場合もありそうだ。反対に、日本人の捉え方が保守的になることもありそうだ。ローズ＝イニスは文法記述では早くからヨン化を指摘しているが、同じ著者が出している日本語学習用の読本は日本人の協力者が読みを付けたらしいことも関係しているだろうが、ヨンがまったく使われていない。文法記述の方が読本よりも先進的な記述になる傾向があるのかもしれない。また、現象自体に地域差、年代差もあるだろうし、ヨンも使うひとがいるけれども正しくはシと言うべきであるというような規範意識も関係しているだろう。高齢の方がヨンではなくシを使い続けているということがあるのは当然であるし、分野によっては、たとえば落語家が古典落語を話すときのように、古いシが若い世代でも保存されているということもある。状況に応じた使い方の差もあるだろう。たとえば、葬式などにおいて僧侶が様式化された話し方をする場合、現代でもクジュークサイということをおとし自身耳にした。同じ場所でお孫さんの弔辞では、キュージューキューサイと発音されていた。シとヨンについても同じようなことがあるに違いない。2009年の静岡大学公開講座でシとヨとヨンについての話をしたが、80代の方から「四杯」を現在でもシハイとふつうに言っているとお聞きした。また、新しい時代でも旧式の判断を唯一の正しい語形と判断するひともいれば、進歩的な判断を容認するひともいるのだろう。それに、使用場面によっての使い分けも考えなくてはならない。1から10まで数えたり、算数の九九の場合や点呼などの場面ではシを使うのが現在においても規範的であるだろう。

さて、「四」のたどった言語変化には、矛盾と矛盾の解消という側面があったと思う。ここで問題にしている矛盾というのは、ヨンを使うようになったのにジューシしか使わないという矛盾のことである。独立用法の数詞「四」の使い方でもヨンが認められるようになってもジューヨンを認めていない発音資料が出版年調査の結果にかなり見つかる（ヴァカーリ 1937、ヴァカーリ [1939]－1946、ヤマギワ 1942、ブロック／ジョーデン 1945、アブラハム／ヤマモト 1950、長沼 1951、マーティン 1954、ジョーデン 1962）。つまり、シの不都合を解消して、ヨンへの変化が起きたが、矛盾を解消することで新たな矛盾が生まれた

と言えるだろう。時間はかかるが、ジューヨンという言い方も一般化し、矛盾を是正する方向でさらに言語変化したと言える。まったく同種の言語変化は今も起きていると言える。城岡（2010）で指摘したキュー切れとジューク切れという言い方はNHK放送文化研究所（2005）が認める唯一の正しい日本語であるが、キューなのにジュークというのは明らかな矛盾であり、すでにわたしも含め、かつての言い方を知らない世代には継承されていない。キュー切れならジューキュー切れが新しい言い方だろう。矛盾を解消する言語変化が起きていると言える。

言語変化が矛盾を生みだし、さらにそれが次の言語変化を引き起こし、その言語変化とともに矛盾も生じ、さらに次の言語変化の推進力となる。言わば矛盾の連鎖反応であるが、このことは数詞を並べて作る概数表現にもあてはまるだろう。概数表現では、 N_1N_2 の N_1 ではヨン化やナナ化が遅れ、 N_2 では早くからヨン化やナナ化が進んでいる。サンヨン本と言うが、シゴ本と言うのが今日の標準的な言い方だろう。 N_1 のヨン化やナナ化はこれから進むと思われる。実は、このような N_1N_2 の概数表現では、 N_2 のヨン化も他の独立用法や助数詞併用形の「四」の用法に対して遅れた事実がはっきりしている。ノッス（1907：156）に *Nihon de wa ni jū san shi wo sugita onna wa amari o shiroyi wo ts'kenai.* とあり、「ニジューサンシの女」で、ニジューサンヨンではない。マーティン（1975：770）は、鉛筆はシホンではなく、ヨンホンと言うと述べているが、サンヨンホンとは決して言わずに、サンシホンとなると述べている。サンシホンについては、ジョーデン（1962）もこの形をあげている。ジョーデン（1962：375）は概数表現が不規則な言い方で、シヤシチという言いの方が普通に出現すると述べている。このような遅れや不規則性は一時期の共時的現象であって、時間が経てば、解消される必然性があったと言えるだろう。今後の言語変化も矛盾を解消する方向で進むことはほぼ間違いないだろう。

【参考資料】²⁷

……………「四銭」……………

- ① シセン（草鹿 1886、コバヤシ [1896]—1908、高橋発音 1904）
- ② ヨンセン（ローズ＝イニス 1919、マツミヤ 1936、マツミヤ 1939、読本教師

²⁷ 図1でグラフ化した「四」と助数詞の組み合わせで、本文中に出版年調査のデータを掲載していないものをヨンの単独使用の初出文献の出版年が早い順に掲載する。

用 1941、ヤマギワ 1942、NHKアク 1943、ブロック／ジョーデン 1945、マツミヤ 1946、長沼 1951、平山アク 1960、ブレイラー 1963、文化庁 1971、文化庁 1975、マーティン 1975、NHKアク 1985、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005)

- ③ シセン、ヨンセン (グロスマン 1927、常深アク 1932、鉄道省 1933、マツミヤ 1937、アブラハム／ヤマモト 1950)

……………「四階」……………

- ① シカイ (コリヤード 1632、ラゲ／オノ 1905、アブラハム／ヤマモト 1950)
- ② シカイ、ヨンカイ (三宅 1943、長沼 1951、田代 1953、ダン／ヤナダ／エコ ン 1958、シラト 1962)
- ③ ヨンカイ (オモト 1936、GHQ 1946、平山アク 1960、オノ 1963、文化庁 1971、文化庁 1975、基礎Ⅰ分冊 1978、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005)
- ④ ヨカイ、ヨンカイ (ペリー 2008)

……………「四軒」……………

- ① シケン (アストン 1869、アストン 1888、コバヤシ [1896]－1908、アカダ／サトミ 1903、ウェイツ 1904、国語調査委 1916)
- ② シケン、ヨンケン (ヤマギワ 1942、タカハシ 1945、長沼 1951、セワード 1968)
- ③ ヨンケン (マツミヤ 1937、マツミヤ 1946、オノ 1963、文化庁 1971、文化庁 1975、基礎Ⅰ分冊 1978、NHKアク 1985、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)

……………「四分(時)」……………

- ① シフン (アカダ／サトミ 1903、マックガバン 1920、マツミヤ 1939、オキノ 1943)
- ② シフン、ヨンブン (グロスマン 1927、ヤマギワ 1942、三宅 1943、タカハシ 1945、マツミヤ 1946、長沼 1951)
- ③ ヨンブン (ブロック／ジョーデン 1945、ジョーデン 1962、ダン／ヤナダ／エコ ン 1958、小川／佐藤 1963、ミウラ 1965、小川 1966、イナモト 1972、ツァハート [1963]－1976、文化庁 1971、文化庁 1975、基礎Ⅰ分冊 1978、NHKことば1 1992、玉村他 1993、タニモリ 1994、にほんごの会 1995、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)
- ④ ヨンフン、ヨンブン (マーティン 1954、ブレイラー 1963、マクレイン 1981)

……………「四か月」……………

- ① シカゲツ (バレー [1899]－1908、アカダ／サトミ 1903、ローズ＝イニス 1919、

オキノ 1943、タカハシ 1945、イノウエ 1958)

- ② シカゲツ、ヨンカゲツ (ヴァカーリ 1937、サリヴァン 1944、長沼 1951、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ツァハート [1963]－1976、イナモト 1972)
- ③ ヨンカゲツ (ブロック／ジョーデン 1945、GHQ 1946、三省堂アク1 1958、ジョーデン 1962、小川／佐藤 1963、オノ 1963、文化庁 1971、文化庁 1975、マーティン 1975、基礎Ⅰ分冊 1978、三省堂アク2 1981、NHKことば1 1992、玉村他 1993、タニモリ 1994、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)

..... 「四秒」

- ① シビョー (アカダ／サトミ 1903)
- ② シビョー、ヨビョー、ヨンビョー (グロスマン 1927、タカハシ 1945)
- ③ シビョー、ヨンビョー (ヤマギワ 1942、ダン／ヤナダ／エコノ 1958)
- ④ ヨンビョー (マーティン 1954、文化庁 1971、イナモト 1972、文化庁 1975、NHKアク 1985、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)

..... 「四杯」

- ① シハイ (アストン 1869、アストン 1888、サトウ2 1879、ラング 1890、コバヤシ [1896]－1908、アカダ／サトミ 1903、ホパ・サトウ3 1904、ウェインツ 1904、ダン／ヤナダ／エコノ 1958)
- ② シハイ、ヨンハイ (ヴァカーリ 1937、ヴァカーリ [1939]－1946、ヤマギワ 1942、三宅読本解説 1943、キヨオカ 1946、長沼 1951、オノ 1963、セワード 1968、文化庁 1971、文化庁 1975)
- ③ ヨンハイ (マーティン 1954、ブレイラー 1963、基礎Ⅰ分冊 1978、マックレイン 1981、NHKことば1 1992、谷守 1992、玉村他 1993、タニモリ 1994、にほんごの会 1995、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)

..... 「四寸」

- ① シスン (ロドリゲス 1608)
- ② シスン、ヨンスン (ヤマギワ 1942)
- ③ ヨンスン (ダン／ヤナダ／エコノ 1958、マーティン 1975、NHKアク 1985)

..... 「四個 (箇)」

- ① シコ (高橋発音 1904、ラゲ／オノ 1905、サリヴァン 1944)
- ② シコ、ヨンコ (ヤマギワ 1942)
- ③ ヨンコ (平山アク 1960、上甲 1960、小川／佐藤 1963、オノ 1963、ブレイラー 1963、セワード 1968、文化庁 1971、文化庁 1975、マーティン 1975、基

礎Ⅰ分冊 1978、NHKアク 1985、NHKことばⅠ 1992、谷守 1992、玉村他 1993、
タニモリ 1994、にほんごの会 1995、NHKアク新 1998、NHKことばⅡ 2005、ペ
リー 2008)

…… 「四着 (衣)」 ……………

- ① シチャク (アカダ/サトミ 1903)
- ② シチャク、ヨンチャク (ヤマギワ 1942)
- ③ ヨンチャク (平山アク 1960、オノ 1963、プレイヤー 1963、セワード 1968、マッ
クレイン 1981、NHKことばⅠ 1992、NHKアク新 1998、NHKことばⅡ 2005)

…… 「四足」 ……………

- ① シソク (アストン 1869、アストン 1888、サトウⅡ 1879、郵松 1886、コバヤシ
[1896]–1908、アカダ/サトミ 1903、高橋発音 1904、ホパ・サトウⅢ 1904、
ウェイツ 1904、オキノ 1943、タカハシ 1945、イノウエ 1958)
- ② シソク、ヨンソク (ヴァカーリ 1937、ヤマギワ 1942、長沼 1951、ダン/ヤナ
ダ/エコノ 1958、オノ 1963、セワード 1968)
- ③ ヨンソク (上甲 1960、プレイヤー 1963、文化庁 1971、文化庁 1975、基礎Ⅰ分
冊 1978、NHKことばⅠ 1992、にほんごの会 1995、NHKアク新 1998、NHKこ
とばⅡ 2005、ペリー 2008)

…… 「四頭」 ……………

- ① シトー (アカダ/サトミ 1903)
- ② シトー、ヨントー (タカハシ 1945)
- ③ ヨントー (小川/佐藤 1963、セワード 1968、文化庁 1971、基礎Ⅰ分冊 1978、
NHKことばⅠ 1992、にほんごの会 1995、NHKことばⅡ 2005、ペリー 2008)

…… 「四割」 ……………

- ① シワリ (ロドリゲス 1608、ホフマン 1867、赤田/里見 1911、ワグスタッフ 1947)
- ② シワリ、ヨワリ、ヨンワリ (グロスマン 1927)
- ③ ヨンワリ (文化庁 1971、文化庁 1975、NHKことばⅠ 1992、NHKアク新 1998、
NHKことばⅡ 2005)

…… 「四代」 ……………

- ① ヨダイ (ランゲ 1890、プラウト 1904、NHKアク 1943)
- ② ヨダイ、ヨンダイ (文化庁 1971)
- ③ ヨンダイ (NHKことばⅠ 1992、NHKアク新 1998、NHKことばⅡ 2005)

…… 「四遍」 ……………

- ① シヘン (ランゲ 1890、ルマレシャル 1904、ノッス 1907、伊沢 1911)

- ② シヘン、ヨンヘン（ヤマギワ 1942、文化庁 1971、文化庁 1975）
- ③ ヨンヘン（NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）
- ④ ヨンヘン、ヨンペン（ペリー 2008）

……………「四度」²⁸……………

- ① ヨド（ロドリゲス 1608、コリヤード 1632、郵松 1886、ランゲ 1890、バレー [1899]－1908、高橋発音 1904、ルマレシャル 1904、和独字彙 1907、ノッス 1907、藤澤 1914、ローズ＝イニス 1919、ヴァカーリ 1937、マーティン 1954）
- ② ヨド、ヨンド（ダン／ヤナダ／エコノ 1958、文化庁 1971、イナモト 1972、マーティン 1975、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）
- ③ ヨンド（ペリー 2008）

……………「四箱」……………

- ① ヨハコ（アカダ／サトミ 1903、グロスマン 1927、ヤマギワ 1942）
- ② ヨハコ、シハコ（ダン／ヤナダ／エコノ 1958）
- ③ ヨハコ、ヨンハコ（文化庁 1971、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）
- ④ ヨンハコ（ペリー 2008）

……………「四組（ペア）」……………

- ヨクミ（アカダ／サトミ 1903、ヤマギワ 1942）
- ヨクミ、シクミ（ダン／ヤナダ／エコノ 1958）
- ヨクミ、ヨクミ（NHKアク 1985、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）
- ヨクミ（ペリー 2008）

【参考文献と引用文献】²⁹

アカダ／サトミ（1903）、（赤田開太／里見順吉）、*How to speak Japanese Correctly*. 初版、岡崎屋書店。

²⁸ 回数の方にはヨドを認めても、温度などではヨンドだけとする文献もあるが、ここでは区別していない。

²⁹ 外国人の著書や外国語で書かれた著書の場合、著者名はカタカナで姓のみを使い、イナモト（1972）のように表記した。本文中の引用もこの方法によっている。外国人の人名は日本語で表記がある場合は尊重したが、それでは不統一になる場合は統一した。たとえば、Rose-Innesの表記は、著書の奥付によると、「ローズ、イニス」「ローズ、イニス」「ローズイニス」と変遷している。この場合は、読みを統一して、さらに複合名であることも分かるように「ローズ＝イニス」と表記した。

- 秋永一枝編 (1958)、『明解日本語アクセント辞典』、三省堂。「三省堂アク 1 1958」
- 秋永一枝編 (1981)、『明解日本語アクセント辞典』 2版、三省堂。「三省堂アク 2 1981」
- 秋永一枝編 (2001)、『新明解日本語アクセント辞典』、三省堂。「三省堂アク 3 2001」
- 浅田健太郎 (2000)、「日本語における半濁音化をめぐる問題」、『鎌倉時代語研究』 23、816-835。
- アストン (1869)、(William George Aston)、*A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*. Nagasaki.
- アストン (1888)、(William George Aston)、*A Grammar of the Japanese Spoken Language*. アストン (1869) の 4 版であるが、初版が全40ページに対して全212ページあり、大幅に内容が増えている。
- アブラハム／ヤマモト (1950)、(Richard D. Abraham & Yamamoto Sannosuke)、*Japanese Conversaphone*. ニューヨーク (R. D. Dortina Co., Inc.)。
- アベ (1937)、(Abe Masanao)、*A New Japanese Course for Beginners*. The Japanese Language Association.
- イーストレキ／神田乃武 (1891)、『和英袖珍新字彙』、三省堂。
- 飯田朝子 (2004)、『数え方の辞典』、小学館。
- 伊澤修二 (1911)、『国定小学読本正読法』、楽石社。「伊澤正読法 1911」とも表記。
- イナモト (1972)、(Inamoto Noboru)、*Colloquial Japanese*. Tuttle.
- イノウエ (1958)、(井上明)、*A New Handbook of Conversation Japanese*. 改訂版、邦題：『新々日本語会話独習』、初版は1954、日研社。
- 井上十吉 (1909)、『新訳和英辞典』、三省堂。
- NHK放送文化研究所編 (1992)、『NHKことばのハンドブック』、日本放送出版協会。「NHKことば 1 1992」とも表記する場合がある。
- NHK放送文化研究所編 (1998)、『NHK日本語発音アクセント辞典新版』、日本放送出版協会。「NHKアク新 1998」とも表記する場合がある。
- NHK放送文化研究所編 (2005)、『NHKことばのハンドブック』 2版、日本放送出版協会。「NHKことば 2 2005」とも表記する場合がある。
- 大槻文彦 (1917)、『口語法別記』、文部省。
- 小川芳男／佐藤純一 (1963)、『日本語四週間』、大学書林。
- オキノ (1943)、(M. Larry Okino)、*Practical Standard Japanese with Military Text*. Philadelphia: David McKay Company.
- 小田切良太郎／ウォールフェールト (1917)、『註解和独辞典』 16版、初版は1912、富山房。「註解和独 [1912]-1917」とも略記。

織田信義／田中旭／今井孝治（1899）、『和仏辞書』、丸善。「丸善和仏」とも略記。

落合直文（1895）、『日本大文典』第2編、博文館。

オノ（1963）、(Ono Hideichi)、*Everyday Expressions in Japanese*. The Hokuseido Press.

オモト（1936）、(尾本憲)、*Mrs. Omoto's Japanese Conversation*. 訂正増補再版、初版は1935年、川瀬日進堂。奥付の住所は兵庫県武庫郡芦屋中程なので関西の方である。

海外技術者研修協会編（1978）、『日本語の基礎 I 〈分冊英語版〉』、海外技術者研修調査会。分冊が10か国語で出ているようだが、同一内容だと思われる。「基礎 I 分冊 1978」とも表記することがある。

金井保三（1901）、『日本俗語文典』、寶永館書店。

金澤一郎（1908）、『日西会話』、大日本図書。

カワタ（1977）、(Yoshiyuki Kawata)、*Let's Speak Japanese*. Hawaii: The Petroglyph Press.

キョオカ（1946）、(清岡暎一)、『日本語速成三十時間』、清話会出版部。

草鹿丁卯次郎（1886）、『独和会話篇』、須原鉄二（出版人）、インターネット上の国立国会図書館近代デジタルライブラリーに収録。

国語調査委員会編（1916）、『口語法』、文部省。「国語調査委 1916」と表記する場合がある。

グロスマン（1927）、(Fred N. Grossmann)、『独習日英会話篇』、川瀬日進堂。

コバヤシ（1908）、(小林米珂)、*Kelly & Walsh's Hand-Book of the Japanese Language for the Use of Tourists and Residents*. 2版、初版は1896年、ケレー・ウォルシュ商会。「コバヤシ [1896]–1908」とも表記。

小宮山治郎八（1898）、『実用速成仏和会話』、尚栄堂、弘集堂。

コリヤード（1632）、復刻及び翻訳が『コイヤード 日本語文典』として大塚高信訳で、坂口書店から1934年に出版されている。

ザイデル（1910）、(August Seidel)、『独和字典』、ベルリン。

迫野虔徳（1989）、「撥音の後のパ行音」、『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』、桜楓社、817–831。

サトウ（1873）、(Ernest Satow)、*Kuawai Hen*. (「会話篇」)。

サトウ／石橋（1876）、(Ernest Mason Satow/Ishibashi Masakata)、初版。復刻版（『英和俗語辞典』、1970、勉誠社）。「サトウ 1 1876」とも表記。

サトウ／石橋（1879）、(Ernest Mason Satow/Ishibashi Masakata)、2版。復刻版（『英和俗語辞典』、1970、勉誠社）。「サトウ 2 1879」とも表記。

- 佐藤寛立案、島田豊訳述（1899）、『新編英和実用会話』、松栄堂。
- サリヴァン（1944）、（E. J. Sullivan）、*Elementary Japanese*. 2版、アメリカ合衆国国家出版局（United States of America Commonwealth Press）。
- サンソム（1928）、（G. B. Sansom）、*An Historical Grammar of Japanese*. Oxford（At the Clarendon Press）。
- GHQ情報教育部編（1946）、（Informagtion & Education Section）、*Japanese Phrase Book for the Occupation Forces*. GHQ. 「GHQ 1946」表記する場合もある。
- シバ（1949）、（芝染太郎）、*Japanese in 3 Weeks*. 34版、初版は1935年、連合プレス。「シバ [1935]－1949」とも表記。
- 島内景二（2008）、『源氏物語ものがたり』、新潮新書。
- シャンド（1907）、（W. J. S. Shand）、*Japanese Self-Taught*. 初版、ロンドン：E. Marlborough. 2版が1915年に出ていて、2005年にインドの出版社から3版の復刻版が出ているが、3版は出版年の記載もない。初版から3版まで内容に違いは見つけられず、おそらく、今日なら1刷、2刷、3刷と言うべきところのようである。
- 上甲幹一（1960）、「助数詞の唱えかた」、『名古屋大学国語国文学』5、1－12。
- ジョーデン（1962）、（Eleanor Harz Jordan）、*Beginning Japanese Part 1*. Yale University Press.
- 初等教育研究会（1933）、『国語読本文字語句の読み方』、増補16版、初版は1924年、培風館。「初教研」とも表記。
- シラト（1962）、（Ichiro Shirato）、*Living Language Conversation Manual Japanese*. ニューヨーク：Crown Publishers.
- 城岡啓二（2009）、「数詞ヨン・ナナ・キューの固有名詞への浸透について―地名、小字名、姓における四・七・九―」、『人文論集』59号の2、静岡大学人文学部、73－105。
- 城岡啓二（2010）、「変化する日本語の近過去を観察する―「当」とヨン・ナナ・キューの言語変化から―」、『聞いてよかった！日本語ゼミナル』、静岡大学人文学部、75－91。
- 神保格（1936）、『小学国語読本朗読法』巻七、厚生閣。
- 神保格（1939）、『小学国語読本朗読法』巻十一、厚生閣。
- 鈴木暢幸（1906）、『日本口語文典』、博文館。
- 鈴木博（1998）、「四の字嫌い―「四」の音「シ」が「死」に通じることを忌む現象について―」、『国語学叢考』、1－35。

- セワード (1968)、(Jack Seward)、*Japanese in Action*. New York・Tokyo (Wetherhill)。
- 添田建治郎 (2006)、「ことばのいのち『一～十』『十～一』の数え方」、『学際』、学際編集委員会編、構造計画研究所、80-85。
- 高橋龍雄 (1904)、『国定読本発音辞典』、同文館。「高橋発音 1904」と表記する場合がある。
- タカハシ (1945)、(高橋盛雄)、『ローマ字・日本語会話』、英題：*How to speak Japanese Language*. 産業図書。
- 竹内善朔 (1907)、『校訂日本俗語文典』増補6版、新智社。
- 田代晃二 (1953)、『標準語のアクセント教本』、創元社。
- 谷守正寛 (1992)、『日本語の文法と用法』、晃洋書房。
- タニモリ (1994)、(谷守正寛)、*Handbook of Japanese Grammar*. Tuttle Publishing.
- 田野村忠温 (1990)、「現代日本語の数詞と助数詞一形態の整理と実態調査一」、『奈良大学紀要』18号、194-216。
- 玉村文郎 (1986)、「数詞・助数詞をめぐって」、『日本語学』、8月号、4-14。
- 玉村文郎他編 (1993)、『日本語実用辞典』、スリーエーネットワーク。
- ダン／ヤナダ／エコノ (1958)、(C. J. Dunn, S. Yanada & M. Econ)、*Teach Yourself Japanese*. The English University Press.
- チェンバレン (1886)、(B. H. Chamberlain)、*A Simplified Grammar of the Japanese Language Modern Written Style*. London, Yokohama.
- チェンバレン (1887)、(B. H. Chamberlain)、『日本小文典』、文部省。
- チェンバレン (1888)、(B. H. Chamberlain)、*A Handook of Colloquial Japanese*. 初版。2版は1889年、3版は1898年、4版は1907年。
- ツァハート (1976)、(H. Zachert)、*Japanische Umgangssprache*. (「口語日本語」、4版、初版は1964。Wiesbaden.
- ツチエ (1948)、(土江清治)、『会話日本語初歩』、大倉書店。扉には『口語日本語初歩』とあり、奥付には『日本語の学び方』になっている。
- 常深千里・神保格 (1932)、『国語発音アクセント辞典』、厚生閣。「常深アク 1932」とも表記。
- 鉄道省編 (1933)、*An Official Guide to Japan. A Handbook for Travellers*. 鉄道省から1922年に出版された *Japan Travellers' Handy Guide*. という本があるが、こちらは地名以外に日本語の記述もなく、数詞や助数詞の情報は含んでいない。
- 寺川喜四男／日下三好 (1945)、『標準日本語発音大辞典』2版、初版は1944、大雅堂。「寺川・日下発音」とも表記。

- 登張信一郎・大黒安三郎・山田基 (1901)、『新和独辞典』、大倉書店。「大倉和独」とも表記。
- 長沼直兄 (1951)、*Grammar & Glossary accompanying Naganuma's Basic Japanese Course*. 開拓社。
- 日本イエズス会編 (1603)、『日葡辞書』、岩波書店から『邦訳日葡辞書』が1980年に、『邦訳日葡辞書索引』が1989年に出版されている。
- にほんごの会編 (1995)、『日本語を学ぶ人の辞典』、新潮社。
- 日本のローマ字社 (1928)、*Pocket Handbook of Colloquial Japanese*. 2版、初版は1920年。「ローマ字社 [1920] - 1928」とも表記。
- 日本放送協会編 (1941)、『同音語類音語』。「同音類音 1941」とも表記。
- 日本放送協会編 (1943)、『日本語アクセント辞典』。「NHKアク 1943」とも表記。
- 日本放送協会編 (1966)、『日本語発音アクセント辞典』。「NHKアク 1966」とも表記。
- 日本放送協会編 (1985)、『日本語発音アクセント辞典』改訂新版。「NHKアク 1985」とも表記。ノグチ (1954)、(Hatsue Noguchi)、*Japanese Conversation*. The Troop Information & Education Section (Headquarters, Camp Kobe).
- ノッス (1907)、(Christopher Noss)、*A Text Book of Colloquial Japanese based on Lehrbuch der Japanischen Umgangssprache*. Methodist Publishing House.
- ヴァカーリ (1937)、(Oreste Vaccari & Enko Elisa Vaccari)、『日本語会話文典』。
- ヴァカーリ (1946)、(Oreste Vaccari & Enko Elisa Vaccari)、*The Up-To-Date English-Japanese Conversation-Dictionary*. 5版。巻頭に日本語の簡易文法があり、数詞についての記述がある。初版は1939年。
- 濱田敦 (1983)、「ハ行音の前の促音—P音の発生—」、『続朝鮮資料による日本語研究』、臨川書店、71-80。
- ハラダ／クニトモ (1934)、(Tasuku Harada & George Tadao Kunitomo)、*Introduction to Colloquial Japanese*. University of Hawaii.
- バラントイン (1949)、(Joseph W. Ballantine)、*Japanese As It Is Spoken; A Beginner's Grammar*. 2版、スタンフォード大学出版。
- バレー (1908)、(Balet)、*Grammair Japonaise*. 3版、三才社。初版は1899年。バレー [1899] - 1908
- 日比谷健次郎／加藤翠溪 (1877)、『和独対訳字林』。
- 平塚定二郎／宍戸深蔵／塚本明³⁰ (1987)、『新撰和独字彙』 4版、初版は1895年、三

³⁰ 最後の文字は「壽」に竹冠。

- 河屋。「和独字彙」とも表記。
- 平山輝男編 (1960)、『全国アクセント辞典』、東京堂。「平山アク 1966」とも表記。
- 藤澤廉之助 (1914)、『新訳独和辞典』、ランゲンシャイト書店。
- ブレイラー (1963)、(Everett F. Bleiler)、*Essential Japanese Grammar*. New York: Dover Publications, Inc.
- ブロック／ジョーデン (1945)、(Bernard Block & Eleanor Harz Jordan)、*Spoken Japanese*. 1 巻、Henry Hold and Company.
- プラウト (1891)、(Hermann Plaut)、*Japanisches Lesebuch*. Stuttgart & Berlin.
- プラウト (1904)、(Hermann Plaut)、*Japanische Konversations-Grammatik*. ドイツ語版初版。ハイデルベルク他：Julius Groos。
- ブリンクリー (1897)、(F. Brinkley／南條文雄／岩崎行親)、『和英大辞典』、4 版、初版は1896年、三省堂。
- 文化庁 (1971)、「数えることば」、『外国人のための基本語用例辞典』初版、付録のpp.55-61。目次に「水谷」とあるので、著者は水谷修。
- 文化庁 (1975)、「助数詞一覧表」、『外国人のための基本語用例辞典』2 版、付録のpp.56-61。
- ヘボン (1867)、(James Curtis Hepburn)、『和英語林集成』初版、「ヘボン 1 1867」とも表記。
- ヘボン (1872)、(James Curtis Hepburn)、『和英語林集成』2 版、「ヘボン 2 1872」とも表記。
- ヘボン (1886)、(James Curtis Hepburn)、『和英語林集成』3 版、「ヘボン 3 1886」とも表記。
- ペリー (2008)、(Fred Perry)、“Grammar”. *Tuttle Concise Japanese Dictionary*. xiii-xxxii.
- ベルリッツ (1974)、*Japanese for Travellers*.
- ホバート＝ハムデン／パーレット改訂 (1904)、(E. M. Hobart-Hampden/H. G. Parlet)、*An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language*. サトウ／石橋 (1876、1879) の 3 版。復刻版 (『英和口語辞典 (第 3 版)』、1985、名著普及会)。「ホバ・サトウ 3 1904」とも表記。
- ホフマン (1867)、(Johann Joseph Hoffmann)、*Japansche Sprachleer*. 1968年に三澤光博訳『日本語文典』が明治書院から出版されている。
- マーティン (1954)、(S. E. Martin)、*Essential Japanese*. 初版、タトル。
- マーティン (1975)、(S. E. Martin)、*A Reference Grammar of Japanese*. タトル。
- 松井知時・上田駿一郎 (1907)、『新和仏辞典』、大倉書店。

- マルタン (1970)、(J. M. Martin)、『マルタン和仏大辞典』、白水社。
- マックガバン (1920)、(William Montgomery McGovern)、*Colloquial Japanese*。架蔵
本は11刷とあるだけで、出版年が未記載である。引用文献やWebcatPlusの情報では、1920年に初版が出ているようである。
- マックレイン (1981)、(Yoko M. McClain)、『口語日本文法便覧』、北星堂。
- マツミヤ (1936)、(松宮彌平)、『日本語会話』巻二、初版、教文館。
- マツミヤ (1937)、(松宮彌平)、*A grammar of spoken Japanese*。2版。初版は1935年。
- マツミヤ (1938)、(松宮彌平)、『日本語会話』巻三、初版、教文館。
- マツミヤ (1939)、(松宮彌平)、『日本語会話』巻一、2版、初版は1937年、教文館。
- マツミヤ (1946)、(松宮一也)、*A Practical Japanese Conversation*。産業図書。
- ミウラ (1965)、(Junji Miura)、*Practical Spoken Japanese Self-Taught*。邦題：『実用日本語会話』三省堂。
- 三森将英編 (1879)、『万国史略字引』。
- 三宅武郎 (1943)、『国民学校アクセント解説』、国語文化研究所。
- 宮島達夫 (1967)、「近代語いの形成」、『ことばの研究 第3集』、国立国語研究所、1
- 50。
- 村 (郵) 松守義 (1886)、『明治会話篇』全3冊、小柳津要人 (出版人)、初版は1885
年。
- 室山敏昭 (1986)、「方言の中の数詞・助数詞」、『日本語学』、8月号、48-57。
- 明治書院 (1986)、「特集 数詞・助数詞」、『日本語学』、8月号。
- 文部省 (1903)、『尋常小学読本』巻一、第一期国定教科書。
- 柳田征司 (1985)、『室町時代の国語』、東京堂。
- 柳田征司 (1991)、『『ニッポン』(日本)と『ニホン』』、『室町時代資料による基本語詞
の研究』、武蔵野書院、55-121。
- ヤマギワ (1942)、(Joseph K. Yamagiwa)、*Modern Conversational Japanese*。McGraw-
Hill。
- 吉川武時 (1989)、『日本語文法入門』、アルク。
- ラゲ／オノ (1905)、(E. Raguet／小野藤太)、『仏和会話大辞典』、天主教教会。
- ランゲ (1890)、(Rudolf Lange)、*Japanisches Lehrbuch der japanischen Umgangssprache*。
Stuttgart & Berlin。(「日本口語教科書」)。
- 竜文館編 (1906)、『校訂日本俗語文典』、竜文館。竹内 (1907)はこの本の2版。
- ルマレシャル (1904)、(J. M. Lemaréchal)、『和仏大辞典』、天主堂。
- レヴィン (2003)、(Bruno Lewin)、*Abriß der Japanischen Grammatik*。5版、初版は

1959年。

- ローズ＝イニス (1915a)、(Arthur Rose-Innes)、*Vocabulary of Common Japanese Words with Numerous Examples & Notes. Conversational Japanese for Beginners*. Part III. ケリー、アンド、ウォルシ株式会社。
- ローズ＝イニス (1915b)、(Arthur Rose-Innes)、*Examples of Conversational Japanese*. Part III. Kelly & Walsh, Ltd.
- ローズ＝イニス (1919a)、(Arthur Rose-Innes)、*Elementary Grammar of the Japanese Spoken Language. Conversational Japanese for Beginners*. New Edition. Part II. 4版、ケリー・アンド・ウォルシ。初版は1916年。
- ローズ＝イニス (1919b)、(Arthur Rose-Innes)、*Conversational Japanese for Beginners. New Edition*. Part II. 4版、ケリー・アンド・ウォルシ。初版は1916年。1935年の6版も調査したが、シ・ヨ・ヨンについての記述に変更は見られなかった。
- ローズ＝イニス (1924)、(Arthur Rose-Innes)、*Japanese Reading for Beginners*. Vol. 2. A few Chinese Characters. 吉川書店 (教文館と印刷した上にシール)。
- ローズ＝イニス (1925a)、(Arthur Rose-Innes)、*Japanese Reading for Beginners*. Vol. 3. More Chinese Characters. Kyo-bun-kan (教文館)。
- ローズ＝イニス (1925b)、(Arthur Rose-Innes)、*Japanese Reading for Beginners*. Vol. 4. The Literary Style. 吉川書店。
- ローズ＝イニス (1928a)、(Arthur Rose-Innes)、*Japanese Reading for Beginners*. Vol. 1. Kana. 2版、吉川書店。初版は1923。
- ローズ＝イニス (1928b)、(Arthur Rose-Innes)、*Japanese Reading for Beginners*. Vol. 5. The Epistolary Style. 吉川書店。
- ローズ＝イニス (1930)、(Arthur Rose-Innes)、*Japanese Reading for Beginners*. Vol. 2. A few Chinese Characters. 2版、吉川書店。初版は1924。
- ローズ＝イニス (1933)、(Arthur Rose-Innes)、*Japanese Reading for Beginners*. Vol. 1. Kana. 4版、吉川書店。初版は1923。
- ロドリゲス (1608)、数詞や助数詞についてのかなり詳細な記述が含まれている第三巻の出版年が1608年であり、全体の翻訳が『日本大文典』として、土井忠生訳注で三省堂から1955年に出版されている。
- ワグスタッフ (1947)、(Edwin Wagstaff)、*Little Giant. Manual and Dictionary Japanese in Roman Letters*. 著者はオレゴン州ポートランド在住のひとで、タイプ原稿を製本したもの。協力者 (collaborator) として Mariko Nishio の名前があげられている。

ウェイツ (1904)、(H. J. Weintz)、*Hossfeld's Japanese Grammar*. ロンドン (Hirschfeld Brothers, Limited)。

ウェイツ (1907)、(H. J. Weintz)、*Japanese Grammar Self-taught*. 2 版。ロンドン (E. Marlborough & co.)。